

山口県立大学国際文化学部

平成14年度 専門演習海外フィールドワーク

## 多文化社会英国を歩く



ユダヤ系コミュニティ (老人ホームにて)



アフロカリビアン系コミュニティ (Community Linksにて)

2003年3月1日

異文化交流論研究室

## 日程

- 11月2日(土) 10:35福岡空港発、15:05香港着、エアポートエクスプレスで九龍島へ、プロムナード散策、スターフェリーで香港島へ、ビクトリアピークに上る、エアポートエクスプレスで空港へ、香港発 <機内泊>
- 3日(日) 6:20ロンドン着、エアバスでホテルへ、荷物を置いて市内へ。コベントガーデン、トラファルガースクエアとナショナルギャラリー、ロンドン塔とタワーブリッジ、<ロンドン泊>
- 4日(月) 午前：大英博物館、午後：英国国際教育センター訪問  
夜：JETS参加者でロンドン大学卒の学生さん（Mr Martin Dusinberre など2名）と夕食交流会 <ロンドン泊>
- 5日(火) 午前：ヒンディー系コミュニティへ  
午後：ハロー学校訪問（学内ツアー、日本語教師へのインタビュー、日本語クラスの見学） <ロンドン泊>
- 6日(水) 午前：ウエストミンスター寺院、ビッグベンと国会議事堂内の教育ツアー  
午後は：午後はNPO（Community Links）を訪問し、スタッフや青年と交流  
<ロンドン泊>
- 7日(木) 午前：ガン・アビブ幼稚園訪問、午後：老人ホーム訪問 <ロンドン泊>
- 8日(金) ロンドンから列車でリーズへ、リーズ大学訪問（イギリス人学生とのディスカッション・セミナー：『日本の戦争責任』、英語クラス参観、「イギリスからみた東アジアと日本」についての講義を受講、学生との交流） <リーズ泊>
- 9日(土) リーズから列車でヨークへ、ヨーク市内研修 <リーズ泊>
- 10日(日) ヌークからリーズを経由してロンドンへ、  
18:05ロンドンから出国 <機内泊>
- 11日(月) 香港経由して20:55福岡空港着  
専用バスで帰宅

## 目次

1. 平成 14 年度専門演習フィールドワークを実施して	岩野雅子	.....	1
2. Trip to the UK	R. クーパー	.....	2
3. 多文化社会イギリス	空田彩佳	.....	6
4. 国際教育	守口奈緒子	.....	8
5. イギリスから見た日本	末岡梨絵	.....	10
6. イギリスの学生との交流	頼重今日子	.....	12
7. 地域を通して助け合うことーCommunity links の訪問ー	岩本道子	.....	14
8. イギリスで出会った若者	後田 明日美	.....	16
9. パブリックスクールーハリーポッターの舞台イギリスを訪ねてー	藤田 量子	.....	20
10. 老人ホームを訪ねて	赤瀬真弓	.....	22
11. リーズ大学言語センターを訪ねて	船曳朋子	.....	25
12. イギリスでの留学生活	木原麻貴	.....	28
13. 日本語を教えるということ	佐高宏美	.....	31
14. イギリスにおける日本語教育	武村 美和	.....	33
15. イギリスにおける日本語教育について	村本実加	.....	37
16. EUの挑戦とイギリスのユーロ不参加について	富樫智美	.....	39
17. イギリスの政治体制	徳本絢	.....	41
18. グローブ座	藤川恵里	.....	44

## 1. 平成14年度専門演習フィールドワークを実施して

「Japan 2001」という祭典が英国中を楽しませた年、山口県から訪英したグループは、ロンドン大学で日英 NPO フォーラムを開催し、ロイヤル・カレッジ・オブ・ロンドンで藍立てと藍染を紹介してきました。日英 NPO フォーラムではコミュニティ・リンクスの活動事例などが報告され、その後、ローランド氏によって山口県でもその活動事例が報告されています。このことから、英国のエスニック・マイノリティの中でも比率の大きいアフロカリビアン系英国人の居住する地区で活動しているコミュニティ・リンクスへの訪問が、まず最初に決定しました。

さらに、国際交流員ロバート・クーパーさんと一緒に計画を進めているうちに、ユダヤ系コミュニティや、ヒンドゥー系コミュニティへの訪問も実現化していき、現代の英国社会の多様性に切り込む入り口がみつかりました。ハロー・スクールへの訪問、リーズ大学での交流、国会議事堂内の議会見学など、友人や恩師、親族や議員などのネットワークを生かして企画を練ってくださったことに対し、クーパーさんに深く感謝の意を表したいと思います。また、テーマを決めての事前学習、そして事後の報告というように、わずか 10 日間の旅に対して 3 ヶ月程度の時間をかけてくれた学生にも感謝します。

英国の大人社会で、学生たちは多くのことを学びました。公共マナーをはじめ、学ぶことへの姿勢、救いを求める者を拒まずという NPO の精神、小さい頃から自立させる教育など。反対に、学生たちの素直な心が、英国で出会った子どもや教員、若者や高齢者たちの心を開いていったことは、英国の人々から驚きと賞賛を受けました。平和で豊かな国に育ち、国際的な感覚をもった学生たちだからこそのできる何かがあると強く感じることができました。それぞれがもっているものを大切に、持っていないものはお互いにできるだけ学びあうようにすればよいということに気づくことのできた旅であったようにも思います。

最後に、学生たちには、これを機会に「地域実習（海外）」といった科目などを通して、次は自分で行く目的や場所、そこで行う活動を計画し、フィールドワークにでかけて行ってほしいと願います。

2003 年 3 月 1 日

国際文化学部 異文化交流論研究室

基礎演習「国際理解」担当

岩野雅子

## 2. Trip to the UK

International Exchange Coordinator

Robert Cooper

Last November Dr Iwano and I took a group of 17 students to the UK for a ten-day study tour, which focused on British society today and the British education system. I thoroughly enjoyed planning and organising the trip with Dr Iwano and I hope that all the students found it enjoyable, educational and stimulating. My aim was to challenge the students' preconceptions of what kind of country the UK is and introduce them to the 'real' Britain.

Despite its size (two thirds the size of Japan), the UK is an extremely diverse country. The differences between urban and rural areas is far more pronounced in Britain than in Japan and the group were able to witness this on the train journey from London to Leeds in the North of England. Whereas the shinkansen from Tokyo to Osaka winds through virtual unending urban sprawl, the view from trains only half an hour from central London is of green fields dotted with sheep, cows and horses.

Britain's diversity is however not limited just to its landscape, but extends to its inhabitants as well. Britain has a long history of accepting immigrants from areas that were once part of the British Empire (India, Pakistan, the West Indies, Hong Kong and parts of Africa...) as well as Jews fleeing persecution in Central and Eastern Europe before and during the Second World War and more recently, asylum seekers from regions of conflict throughout the world: Kosovo, Somalia, Iraq, Afghanistan etc. In fact, UN reports show that in 2002 the UK received more requests for asylum than any other country. Britain's multiculturalism must have been evident to the group as soon as we arrived in London, our first destination. Just walking around central London, one encounters people from a huge variety of ethnic backgrounds, working and living in the city.

During our time in Britain, the students were able not just to observe the various communities that inhabit London, but also to meet and interact with members of those communities. We visited the Hindu temple in Neasden, North London (the largest outside of India) on Indian New Year. The hundreds of people dressed in traditional saris, the beauty of the temple itself (paid for by members of the community) and the warm welcome we received were extremely impressive and clearly illustrated the sense of pride and confidence the Anglo-Indian community has in itself.

The same can also be said of the Jewish kindergarten and old-age home that welcomed us. At the former, it was fascinating to see how the children who attend this nursery are brought up in two cultures, with a respect for traditional values combined with a modern outlook. At the latter, the level of inter-communal support was clear to me when the head of the home explained how wealthy residents subsidise those from more disadvantaged backgrounds, in order that all members of the community receive an equal level of care in old age.

Describing British society as a series of success stories with no shortcomings would however be a fallacy. Japan has achieved a far higher average standard of living than Britain and the gap between rich and poor is far greater in the UK. Our study trip did not gloss over this. On our third day in Britain we spent the afternoon at Harrow School, one of Britain's most famous public schools. Harrow is attended by boys from elite families from throughout Britain and the world. Its history and list of old boys is impressive and the Japanese language classes that we were allowed to sit in on were no doubt extremely educational for those YPU students who hope to become teachers of Japanese to foreign students. However, followed by a visit to Community Links the next day, the discrepancy between the two symbolises all that is bad about modern Britain.

Community Links is an organisation, based in a deprived area of East London, that provides a range of services to the local community, including a kindergarten, schooling for (often violent) children excluded from all other local schools, a youth centre and entertainment for the elderly. After a tour of the facilities the YPU students got the chance to meet and talk with the (mostly Afro-Caribbean) children who go to the Youth Centre. Despite the huge educational, social and cultural gaps I was moved to see how well they got on with and interacted with each other. I hope that the afternoon spent at Community Links made the YPU students appreciative of two things: firstly, the similarities between peoples irrespective of superficial social and cultural differences and secondly, the admirable way in which Japanese society has achieved such a high standard of living with very few left behind.

Like in all countries, there are both positive and negative aspects to British culture and society. Although the study trip was only ten days, I hope that all the students in the group not only learnt a great deal about both these positive and negative aspects of the UK but also, through a comparison of Britain with Japan, were able to look at Japan in a fresh light, appreciating its own positive and negative sides.

## <概訳>

昨年11月、私と岩野先生は17名の学生を引率して、今日の英国社会と教育制度に焦点を当てた10日間のスタディーツアーに出かけました。この企画を立て実施することを、私自身とても楽しんだのですが、何よりも学生たちが興味をもってくれることを願っていました。私は、学生たちがもっている英国はこういう国という先入観を打ち破ることにチャレンジしてみたく、また、学生たちに私の考える本当の英国の姿を紹介したいと考えました。

日本の約3分の2という国土にもかかわらず、英国は非常に多様な社会の様相をしています。例えば、都市と農村との違いは日本よりももっとはっきりしていますから、学生たちはロンドンから北部イングランドの都市リーズへの列車の旅で、この違いについて自分たちの目で見ることができました。東京から大阪に向かう新幹線の車窓は、どこまでも同じように続く街並みを映すだけですが、ロンドンから北に向かう列車の窓からは、半時間もすると、羊や牛や馬を点描とする緑の景色を見ることができるのです。

英国の多様性は、こういった風景にのみ表れているのではなく、そこに暮らす住人にも見られます。英国は、かつての大英帝国といわれた地域（インド、パキスタン、東インド諸島、香港、アフリカの地域など）から移民を受け入れてきた長い歴史があります。そして、第2次世界大戦の前から、また大戦中にも、中央ヨーロッパや東ヨーロッパから逃げてきたユダヤ人の受け入れの歴史もあり、近年では、世界の様々な地域（コンボ、ソマリア、イラク、アフガニスタンなど）で起こる紛争地域からの難民も受け入れています。2002年に発行された国連の報告によると、英国は他のどの国よりも多くの難民を受け入れているのです。そういった英国の多文化主義は、学生たちがロンドンに到着するやいなや明らかなものとなるはずですが、ロンドンの中心を歩くだけで、そこに暮らす人々の非常に多様なエスニック・バックグラウンドに気づくことができます。

英国での滞在中に、学生たちはロンドンに暮らす様々な住民を観察することができましたが、観察するだけにとどまらず、そういったコミュニティの人々と交流することもできました。私たちは、ロンドンの北、ニースデンという地区にあるヒンドゥーのコミュニティを訪れ、インドの新年を祝う行事（インドの外では最大のもの）に参加しました。伝統的なサリーに身を包んだ何百人という人々、そして、そのコミュニティが建設したヒンドゥー寺院の美しさを目の当たりにしましたが、それにもまして、私たちを受け入れてくれた人々の温かな歓迎の心は印象的であり、そこには、インド系英国人コミュニティが今日持つにいたった誇りと自信が明確に表現されていると感じました。

同様のことは、私たちを歓迎してくれたユダヤ系英国人の幼稚園と老人ホームでもいえます。幼稚園では、現代的な生活の仕方のなかに伝統的な価値の尊重を組み入れており、子どもたちがどのようにして2つの文化の中で育てられていくかを見てすばらしく思いました。老人ホームでは、裕福な住民が貧しい住民の負担をして、ユダヤ人住民で

あればすべての高齢者に同等のケアが行き届くようになっているという主任職員の説明を聞き、コミュニティ内の相互支援のしくみがわかりました。

しかし、このようにして英国社会の成功例ばかりを学生に示すのは間違いでしょう。日本は、英国よりもはるかに高い生活レベルに達しており、人々の貧富の差をみると英国の方が大きいといえます。私たちのスタディーツアーはこの点についてうわべだけを飾ることはしませんでした。英国での3日目には、まず英国で最も有名な私立学校であるハロー・スクールに行きました。ハロー・スクールには、英国中のエリートの家庭から、そして海外のエリートの家庭からも、男子生徒が集まっています。その歴史も、またハロー・スクールが輩出した人物リストにも驚くものがありますが、学生たちが参加することを許可された「日本語」の授業もまた非常に教育的なものであり、将来外国人への日本語教師を目指す学生たちには特に参考になったことと思います。そして、その対極にある翌日のコミュニティ・リンクスへの訪問は、現代の英国社会がもつ悪い点と、貧富の差という社会の矛盾を象徴的に表すものとなりました。

コミュニティ・リンクスは、ロンドン東部の貧困地区にある団体です。義務教育から排除された子ども達を受け入れる幼稚園や学校、若者を受け入れるセンターや、高齢者へのデイケアなどの事業を通して、この地区に暮らす住民に様々なサービスを提供しています。団体の事務所や施設を見学した後、学生たちはユース・センターで子ども達（ほとんどは黒人系英国人：アフロカリビアン）の若者）と出会い話をする機会を得ました。学生とその若者たちとの間には、非常に大きな教育的・社会的・文化的な溝がありましたが、それにもかかわらず、両者が話に溶け込み、交流している姿をみて、ある種の感動を覚えました。私は、この日の午後のこの出来事を通して、日本から英国にやってきた学生たちが次の2つの点に気づいてくれたことを期待しています。第一は、表面的な社会的・文化的違いの下には人間として同じものをもっているということへの理解、第二は、ほぼすべての人々が非常に高い生活レベルを享受できるような社会に日本が到達したということへの感謝です。

すべての国々がそうであるように、英国社会も英国文化もまた、良い面と悪い面とをもちあわせています。スタディーツアーはわずか10日間でしたが、すべての学生が英国社会の良い面と悪い面について深く学んでくれたことを願うとともに、英国社会を日本と比較することで、日本がもつ良い面と悪い面についても正しく認識するために、日本を新たな目でみつめ直すことができたのではないかと考えています。

(国際交流員 ロバート・クーパー)



### 3. 多文化社会イギリス

空田彩佳

今回のスタディーツアーで考えさせられたことは、イギリスが多文化社会であるということである。様々な場所を訪問したが、決して広いとはいえないこの土地に多くの異なった文化が存在していた。

まず、イギリスの中でも名門校中の名門校と言われるハロー・スクール。ハロー・スクールは男子校で、13歳から18歳までの男の子が在学している全寮制の学校である。イギリスの中で最も古い学校の一つで、たくさんの有名な人がハローで教育を受けたようだ。例えば、詩人、小説家、芸術家、そして王室関係者がハローで学び、卒業もしている。歴代の英国首相のうち、7人がハロー・スクールの出身者であると聞きとても驚いた。そのうち最も有名なのは、第二次世界大戦のときの首相、ウィンストン・チャーチル卿 (Sir Winston Leonard Spencer Churchill 1874~1965)だ。また、現在でも、例えばヨルダンの国王がハローで学び、またその国王の男のお子さんも全員ハローで学んでいるそうである。タイの国王やタイの王室も、同じようにハローで学んでいる。実際にハロー・スクールの生徒をみってみると、勉強もよくし、またスポーツにも取り組んでいる姿が見受けられ、まさしく文武両道を実践しているところであると感じた。またこの生徒は決められた時間には教会に行きお祈りをしていると聞き、その教会に入ってみて、格式の高さを目の当たりにした。

次に訪れたウエストミンスター寺院は、ゴシック建築の荘厳な佇まいをみせていた。そこはただの教会ではなく、イギリスのほとんどの王たちが戴冠式を行い、またジェフリー・チョーサー (1343-1400)、ウィリアム・シェークスピア (1564-1616)をはじめとする多くの作家、俳優、音楽家たちの彫像があり、数々の王たちの聖廟もあった。ウエストミンスター寺院は大英国家の歴史を大事に保存する「現代に生きる教会」であり、教会全体からキリスト教色がにじみ出ているような印象を受けた。これらのいわゆる伝統的な英国の姿をみたあとで訪れたのが、コミュニティ・リンクスであった。

イギリスのボランティア団体であるコミュニティ・リンクスの活動内容としては、老人に対するデイ・サービス、失業者への仕事の斡旋、不登校や退学した青少年と交流したり勉強したりする場を与えたりすることなどがある。この地区に着いた際にまず感じたことは、今まで訪問してきた場所とは雰囲気は全く違うということだった。ガラスの割れた店、あまり舗装されていない道路などが見受けられた。コミュニティリンクスは、こうした恵まれない地域を対象に活動している。施設内では学校を終えた子どもたちが集まっておしゃべりをしたり、あるいは備え付けの機器でDJをしたり音楽を聞いたり、

と自由に過ごしていた。何時くらいまでこうして過ごしているのかと聞くと、22 時までだと担当の方に言われた。学校から家に帰っても親がいなくて一人ぼっちで過ごすようになる子もいるため、このようなシステムがあると聞き、とてもショックを受けた。そこで活動している 14-16 歳の子たちと交流する機会をもった。その子たちはとても明るく、またずっと大人びていて驚かされた。私たちは趣味の話などをし、歌を歌ったりもした。お互いに知っている歌があったりしたときはいつそう盛り上がり、またお互いの国で流行っている歌を紹介したりして、とても新鮮な気分を味わうことができた。

ここで考えてみるべき問題があると思う。それは、イギリスにはまだ階級社会が残っているのではないかということである。たしかに 18 世紀後半に始まった階級社会は終わりを迎えたかもしれない。しかし現代にも何らかの形で存在するのではないか。そして、その階級社会の中に、エスニック・マイノリティの人々は組み込まれており、階級社会の壁を壊せないでいるのではないかということである。この度訪れたハロー・スクールとコミュニティ・リンクスの両極端にある環境を取り上げてみてもわかるように、恵まれている地域と恵まれていない地域というのは確かに存在するのであり、まだまだ階級社会の風潮が残っているように思われる。この風潮を少しでも改善していくことこそ、恵まれない地域の問題などを解決していくことにつながるように思える。どこの場所に住んでいようと人の本質は変わらないし、差もないのである。集団としてだけではなく、個人を尊重できる社会を作らなければいけないと思う。その意味で、「開発途上国は先進国の中にもある」という英国 NGO や NPO の主張と活動は、参考になる。

今回のスタディーツアーを通して、イギリスだけではなく、日本やほかの地域のことも考えてみるようになった。いろいろな人種やエスニック・バックグラウンドをもった人々が共存し、多くの宗教が混在し、その影響で多くの文化が生み出されたイギリスをじかに見ることによって、多くの異なった文化をもつ世界の人々が共存していくことは決して簡単なことではないと感じた。しかし、一方で、そうしていかなければならないのだということを感じることもできたと思う。

〈参考ホームページ〉

<http://ss5.inet-osaka.or.jp/~kinrans/uk-harrow.htm>

<http://www.westminster-abbey.org/>

<http://www.community-links.org>

## 4. 国際教育

守口 奈緒子

ここでは、英国国際教育研究所を訪問した際の図師照幸氏の講演内容をまとめることにしたい。図師氏の講演から、異なる文化を学ぶということはどういうことなのか、国際化とは何か、また国際人になることはどういうことなのかということ学ぶことができたと思う。まず、英国国際教育研究所について説明した後、その講演内容にふれていくことにする。

### (1) 英国国際教育研究所

英国国際教育研究所は、英国ロンドンに本部を置く国際教育研究機関である。ロンドン市内のグリニッジ・キャンパスを拠点とし、国際教育という視点から教育本来の位置づけを試みるという理念の下に、研究および教育実践活動を展開している。また日本語学、言語学、日本語教育、言語教育を研究対象とする「日本語教育協議会」および日英の教育制度や教育問題さらに文化研究をその主たる研究対象とする「日英の教育と文化に関する研究協議会」という両学会の本部として、総会ならび研究発表大会の開催、研究紀要や会報の刊行等の活動を行っている。私達はこの英国国際教育研究所のキャンパスの1つであるリージェンツ・カレッジ・キャンパスを訪問させていただいた。このキャンパスはロンドンで最大の公園 Regent's Park 内に位置している。

### (2) 講演「国際理解教育が拓くもの」

今回の訪問の中で私達は、英国国際教育研究所の所長である図師照幸氏から「国際理解教育が拓くもの」と題した講演を聴く機会を得た。講演概要は以下のとおりであった。

イギリス人は日本のことを日本人が考えているほどは知らない。知っていたとしてもその知識はかなり古いものである。例えば、英国の大学入試の資格試験である GCE-A レベルの日本語試験では、何十年前の言葉使いや、生活・文化内容がつい最近まで使用されてきた。しかし、日本の大使館はこの誤りを知っていたにも関わらず、訂正しようとしなかった。日本は、自分たちのことを他国に知ってもらおうという努力が足りないのである。

2002 年から日本の学校に週休 2 日制が導入された。従来の詰め込み教育の反省から、ゆとり教育が求められるようになったからである。しかし、そのゆとり教育は学力低下をもたらすとして批判され始めている。そんな中、小学校に英語教育を導入する動きが見られる。このことについては賛否両論、さまざま様々な意見があるようだ。反対派の意見の一つには次のようなものがある。「英語教育の導入によって、子ども達の大事な時間が英語に費やされてしまう。英語の勉強を必要としない英語圏の人々は、その間に他の勉強をすることができ、世界のリーダーになっていく」。図師氏は、これは大きな間違いであるという。イギリスでは 7 歳ぐらいから言語教育を行っている。第一外国語や第

二外国語の学習に力を入れており、小・中・高の間に約5カ国の言語を学ぶ子どももいる。特にマイナーな言語の学習が奨励されている。その理由は、様々な言語を身につけなければ、世界のリーダーシップを担うことができないと考えられているからである。日本の子どもたちが第一外国語の英語にてこずっている間に、世界の子どもたちは二つも三つも身につけている。EUの中で、様々な言語の使用ニーズが高まっている今日では、その傾向はますます大きくなっている。

日本人の考え方は自己中心的であると図師氏は言う。日本語教育が何のためにあるのかを考える時、多くの教育者は日本人のものの考え方や文化を外国の人に知ってもらうためだと考える。しかし、この考え方はどこかが違うそう。それは、教育は「学ぶ人」のためにあるからである。学ぶ人にとって日本語を学ぶことに何の利益があるのかについて、相手の立場に立って考えることが大切なのである。国の枠がなくなりつつある現代の中で、日本はまだ枠を持っているという。枠の中で、自国の利益ばかりを考えていると日本は孤立してしまう恐れがある。そんな枠の中で生きながら、英語が完璧にできたからといって、日本人はたして国際人になれるのだろうか。この問題は「なぜ異文化に学ぼうとするのか」「なぜ外国語を学ぼうとするのか」ということにつながってくる。そしてこれらの問いは「なぜ学ぶのか」ということにもつながってくるのだと図師氏はおっしゃった。

近年、日本で注目されている国際理解教育を図師氏は次のように定義している。『異文化なるものの正確な理解を通して、その異文化なるものの中に人間存在の普遍なるものを見出す力（すなわち知性）の養成である』。国際化ということ、日本は外国的なものを選択して取り入れ、外国文化を日本化しようとする傾向にある。つまり、日本においては、国際化とは「外国化」とか「日本化」とかいった二極化で考えられているのである。図師氏によると、国際化とは「地球化」である。「地球化」とは異なるものを理解し、受け入れることである。人々にとって特定の文化が特殊なものではなく、普遍的なものになることによってその文化は価値を持つ。ここでいう普遍的なものとはいったい何であろうか。それはあらゆる人が幸せになり、生きるために意味のあるものになるということである。

今日の地球問題について、エドワード・サイード氏の次のような言葉を図師氏は引用された。「人類に問題があることはしかたのないことである。過去の歴史をつくったのは人間である。そして、未来をつくるのも人間である」。このことは人生においても同じことがいえると、図師氏は最後に次の言葉を私達へのメッセージとして、講演をしめくくられた。

「今までが自分の道のりならば、明日からも自分の道のりである」。自分の未来に希望をもつことは、人類の未来に希望をもつことである。未来は人の手で、必ず切り開くことができるのだと。

## 5. イギリスから見た日本

末岡 梨絵

イギリスに滞在中に、私はできるだけ多くの人に日本のイメージ等を聞こうと思っていた。しかし、考えていたほど多くの人に聞くことができず、自分が消極的であることを痛感した。それでも何人かの人に日本のイメージを聞くことができたので、ここに書いてみたい。

まず、Community Links で出会った 15 才の女の子ピュリティは、日本は教育システムが良いと言っていた。国際交流員ロバート・クーパーさんの叔母のアニータさんは、日本のイメージは小さくてかわいいことや、緑や盆栽といったものを挙げた。また、リーズ大学で出会った学生のキールは、日本は忙しいこと、そして、寺院のように古いものと近代的で新しいものが一緒に混在していること、と言っていた。今紹介した 3 人は日本に興味がある人達なので、一般的なイギリス人の日本に対するイメージとは少し違ったところがあるかもしれない。調べたところによると、大抵のイギリス人は日本についての知識はほとんどなく、また興味もないと言われている。それは日本にだけ興味がないのではなく、外国への興味自体がないようだ。その理由は、Harrow School の日本語教師によると、「イギリス国内には様々な民族背景の人がいるので、わざわざ自分から他国へ行ったり興味を持ったりしなくても、国内にいただけでいろいろな国の人に会えたり情報が入ってくる。それで、とりたてて他国に関心を持つことはそんなに必要ではないと思われる」そうだ。日本の他国への関心や依存にはものすごいものがあり、同時に自国が他国からどう見られているかということ強い興味をもっている。こんなところに、日本とイギリスとの大きな違いを感じた。また、日本はイギリスでの PR が足りないとも言われた。それでも、最近ではイギリスでも少しずつ日本に対しての興味が増えつつあるようだ。実際、街を歩いているときやショッピングのときに、片言の日本語で挨拶をしてくれる人がたくさんいたのには驚いた。

イギリスに滞在中、地下鉄を頻繁に利用した。その際、気になったものがある。それは、あるポスターだ。赤いポピーの花が描いてあり、「We shall not weaken or tire」というメッセージのものと、「Please remember my Daddy」というメッセージのものと 2 種類があった。街には募金活動をしている人がたくさんいて、募金をすると胸にポピーをつくってくれる。赤いポピーは、道を歩いている人の胸、テレビに映るキャスターの胸と、かなり多くの人がつけているのを見かけた。はじめはこれが何を意味するのかまったく分からなかったが、その活動は戦争で亡くなった人達を悼むためのものであることを知った。毎年 11 月 11 日は remembrance day と呼ばれ、終戦の記念日とされている。Remembrance day には記念塔の前で式典が行われ、女王をはじめとして王

室や内閣のメンバーなど多くの人出席する。イギリスにとって日本は敵国であったため、remembrance dayには日本人はロンドンの街を歩きにくいと言われている。国連においても、この敵国条項の撤廃は難しいと考えられており、あらためて「世界の敵、日本」のイメージが海外では根強いことを痛感した。最近では、若者の間では戦争による日本への嫌悪感はそれほどでもないそうだが、戦争の時代を生きてきたお年寄りの中にはまだ日本に対する憎しみを持っておられる方も多いそうだ。イギリスに行く前は、そんなことを少しも考えてもいなかったのも、非常に驚いた。リーズ大学で日本の戦争責任についてのディスカッションがあったこともあって、今回のフィールドワークで私の一番印象に残ったことは、イギリスから見た日本のイメージ中でも、特に日本の戦争責任にかかわるものだった。かなりの衝撃を受けた。

しかし一方では、経済面ではイギリスと日本は非常に良い関係にあるという話も聞いた。戦時中は敵国であった国同士が、しこりを残しながらも良い関係にあるというのは不思議な感じもする。日本とかつての敵国にあった国々がこれからより良い関係を築いていこうとするとき、戦争の話は避けては通れないものだと思った。いくら表面上・外交上で友好関係にあってもだめで、その国に住む人と人が互いに理解しあい認め合ってこそ本当の友好関係なんだと思う。その意味では、世界の60カ国近くを敵国として戦った日本に課せられた課題はあまりにも大きい。

イギリス人の中にはまだ日本を好きではない人が多くいるという事実直面したことは、日本人として悲しく思ったし、反対に日本に興味を持ち日本語を勉強している人達がいることはうれしかった。私は、私自身、日本が好きなんだと改めて実感した。リーズ大学のディスカッションでは、日本人である私よりも、イギリス人学生達の方が日本の歴史や政治についてよく勉強していて、いろいろな事をよく調べていたので恥ずかしく思った。まずは自国の文化や歴史を勉強しようと思う。今回のフィールドワークは、厳しい面で私に刺激を与えてくれたように思う。

## 6. イギリスの学生との交流

頼重 今日子

今回のイギリスへのフィールドワークを通し、現地で多くの人たちと出会うことができた。特に、同じくらいの年齢の人（高校生や大学生）との交流が持てて日本の学生とイギリスの学生を比べてみていろいろな違いを発見することができた。実際に大学で授業に参加することもでき、自分自身でイギリスの学生の授業に対する姿勢や学校内の雰囲気を感じることもできた。自由な交流会が設けられ、日頃の彼らの生活を聞くこともできた。ハロー学校では学内見学、コミュニティー・リンクスではそこに集う若者との交流、リーズ大学では学生との交流等があった。

### (1) ハロー・スクールにて

ハロー・スクールは男子校で、13歳から18歳までの男子を対象とする全寮制の学校である。創立は1572年で400年以上の歴史があり、イギリスの中で最も古い学校の一つである。たくさんの有名な人がハローで教育を受けており、例えば、詩人、小説家、芸術家、あるいは王室関係者がハローで今学んでいた。歴代英国の首相のうち7人がハロースクールの出身者である。

ハローの学生は休みの期間を除いて、月曜から土曜まで常に学校で何らかの授業なりテストなり、スポーツなどを行っている。学校の先生はただ教えるだけではなく、クラブ活動とか、あるいは社交とかの運営をし、そういったものに生徒を参加させることを通して、教養といった分野を含めて生徒の教育に関わることを行っている。音楽コンサートや演劇、映画などの上映もあり、学校内に音楽ホールは2つあった。このような教育環境により、生徒たちは自分が興味のあるものや得意なものを見つけ出していくのだ。

私立学校なので、日本の公立学校との違いは大きい。広い敷地内にいくつもの大きな建物が、まるで町を形成するかのように建ち並ぶ。一見、学校には見えないほどだ。歴史ある学校なので、制服や建物にも伝統的なものを残し大切にしている。最近では、日本でも少人数授業を導入する考えが出ているが、ハロー・スクールで日本語の授業を見学した時、本当に数人の授業が大切に、また当然のように行われていたのに驚いた。少人数授業なので、生徒一人一人がしっかりと授業に参加でき、勉強の伸びも良い。イギリスの上流家庭では伝統的に家庭教師がマン・ツー・マンで教えていた時代もあったそうだが、贅沢な教育環境に学ぶ生徒たちもいるものだとつくづく感じた。

### (2) コミュニティー・リンクス

ここは、正規の職員やボランティアたちが、様々な活動（老人のための活動や、学校に何らかの事情で行ってない子どもたちの受け入れなど）を地域社会で行っている団体である。私達が交流をしたのは、生活上あまり恵まれていない家庭に育った高校生達だ

った。家に帰っても充実した時間が過ごせないため、放課後はここで過ごす。前日、ハロー・スクールに行き、イギリスの教育制度では誰もが充実した教育を受けることができるものだと思い込んでいたが、このような施設があることに驚いた。日本の場合、このような貧富の差、社会環境のギャップは考えにくい。実際に話をしてみると、彼女達はとても明るく、前向きであることが分った。自分の意見をしっかり持っており、将来の夢などを語ってくれた。そしてもう一つ強く感じたのは、彼女達も私達も同じ年代であることによって、興味のあることや趣味などにはなんら変わらないということだ。国が違うから、生育環境が違うから・・・と、最初から「違い」ばかりを探していたのだが、明るく、オープンな彼女達によって、すぐにとけこむことができた。私達は、特にこのようなことを苦手とする。つまり、なかなか自分の意見を口にだせない、自分から見知らぬ人の中に入っていけないなど、消極的な態度をとってしまいがちである。彼女達との交流を通して、改めて自分たちのネガティブな点に気づくことができた。

### (3) リーズ大学

イギリスの北部に位置するリーズ。リーズ大学に在籍する学生は約 50,000 人で、世界中から学生が集まっている。ここでは、「日本の戦争責任」についてのディスカッションに参加した。もちろん英語での意見交換なので、かなり苦勞した。この授業に参加する前に、私達も勉強をして行ったのだが、彼らは私達日本人以上に詳しく勉強していた。沈黙するということがないくらいに、次々と意見を交し合う。疑問点があればすぐに質問する。自分の考えを口に出して言わないと、授業に参加していないように思えたほどである。後で、日本語の授業にも参加させてもらった。日本語をゼロから学び始めてまだ 2~3 年というのに、学生たちは日常会話が十分できるようになっている。日本人先生は、授業の中ではすべてを日本語で教えており、とてもリラックスした授業雰囲気であったように感じた。反面、環境問題についての記事を日本語で読み、次週までに日本語でエッセイを書いてくるという課題もでて、高度な内容を淡々とこなしているように感じられた。ここも、やはり勉強面での積極的な姿勢に大きな違いを感じた。

イギリス人学生との交流を通し、広い視野を持つ人々との出会いによって自分自身がすごく刺激されたように思う。これをきっかけに、自分の態度を振り返ることができた。しかし、イギリスの全てが日本に比べて優れているわけではない。特に感じたのは、公共施設の汚さだ。ゴミの多さ、トイレの使い方にしても日本に比べてとても汚かった。自国の良いところにも改めて気づくことができたと思う。お互いに良いところを認め合うことが、国際交流するうえで大切なことである。もちろん、全てが異なっているわけではないことも頭に入れて、同じところにも目をむけ、理解し、受け入れたいと思う。



## 7. 地域を通して助け合うこと —Community links の訪問—

岩本道子

イギリスで私たちはコミュニティー・リンクスという NPO 団体を訪れた。私たちの持っているイギリスの町のイメージとはすこし違う場所に、コミュニティー・リンクスはあった。コミュニティー・リンクスでは、「地域を通じて、地域を助ける」という活動を見た。誰にでも門戸をひらくという姿勢。一番印象に残ったのは、「助けを求められたら、それがどんなものでも拒絶しない。ここで助けられなくても他の場所で助けられるところを探す」という活動方針である。この言葉が示すように、ここでの活動は、まさに地域を通して助け合う、community(地域)における links(つながり)だった。

### (1) Community Links

コミュニティー・リンクスの活動は、基本的にはボランティア活動である。ユーザーと呼ばれる専門職(有給)の人々を中心として、ボランティア(無給)の多くの人々が、地域に住んでいるお年寄りから子どもまでを対象にした活動を計画・実施し、地域サービスが地域の人すべてに行き届くように配慮する努力をしている。例えば、何らかの事情で教育を受けることができなかつた子どもたちや、一人で暮らす老人への支援や協力をしている。ここには「CBS」と言われる8才から11才ぐらいまでを対象とした活動があるが、それは子どもにとって大切な遊びの時期を助けるものとなっている。子どもへの教育としては、まず家庭でなおざりにされているしつけを行い、子どもの集まれる溜まり場を提供し、さらには学校外教育を行っている。

まず私たちが実際に見学したのは、不登校など様々な理由で学校に行かれない子どもたちへの教育場所の提供である。ここでは、「安定した環境」を子どもたちに与えるため、専任の教員を配置して指導にあたっている。親の事情など、さまざまな理由で学校に行かなくなった子どもたちのために、学校などの教育機関の代わりとして教育する。日本の「保健室登校」と少し似ているかもしれない。数学やIT教育などがされていた。ただ、最初は読み書きができない子どもや、乱暴な子どももいるらしく、口で言うほど簡単ではないそう。次にコミュニティーリンクスの建物の中で、お年寄りが集まっているところを見た。日本で言うところのデイ・ケアのようなもので、一人暮らしの老人が集まれる場をつくって、ビンゴゲームやカードゲームなどをし、話し相手をお互いの中から見つける機会をつくるのと、ボランティアがそれとなく日々の暮らしの質問をして、何か問題が起こっていないかを知る機会となっている。

私たちがコミュニティー・リンクスの本部の建物内で見たものは、コミュニティー・リンクスの活動の一部でしかない。しかし、そこには私が想像していなかった地域とのつながりがあった。これらの活動は、地域の人々との信頼関係があつてこそできるもの

だ。スタッフは、町ですれ違う人々や子ども達にも、一言一言あいさつを交わしていた。そして、そんななんでもない簡単なことから信頼関係を築き上げているスタッフの方々の努力を目の当たりにした。

## (2) 交流を通して見えたもの

コミュニティー・リンクスの活動を紹介していただいた後、そこにきている人たちと交流する機会があった。そこは、「The Canteen」と呼ばれる場所であり、コンピューターやゲーム機、ビリヤードなどさまざまなものが置いてあり、そこに地域の青少年が遊びに来ているのだった。年齢は小学生くらいから高校生くらいまで。交流では高校生くらいの子供達と行われた。私は3人の15才の少女たちと話をした。彼女たちは自分の将来にはっきりとした夢を持っていた。彼女たちと日本の同年代の子供達とを比べてみると、「夢」をもてるかどうかの違いがあるような気がした。家庭・学校・社会で恵まれない環境に暮らしている子供達でも、夢をもてるように支援する人々がいることによって、非行その他に走りやすい青少年の表情を明るくしている何かがある。そこにはあった。それに比べると、裕福な条件にありながら、はっきりした「夢」をもっている日本の少女は少ないのではないだろうか？

私は「The Canteen」を訪れて、自分たちの豊かさを再認識した。コンピューターやテレビが一家に一台、あるいは一人に一台あるかもしれない日本の家庭。このコミュニティー・リンクスの「The Canteen」には、自宅にそのようなものが無い子供達が集まり、古い機材を順番に使って楽しんでいて、機材を使うことを楽しむというよりも、機材や場を通して仲間たちとのふれあいを楽しんでいるかのようでもあった。



コミュニティーリンクスの訪問には、今まで想像していたイギリスのイメージをがらりと変えるものがあった。ロンドンの中心部のような比較的豊かな環境に、それとは対照的な生活環境を見ることができた。人と人とのつながりを大切に、それを地域の人たちと生かしていくコミュニティー・リンクスの精神を見習い、日本でもこのような活動を応用できるシステムが必要だと感じた。

参考://[www.communitylinks.co.uk](http://www.communitylinks.co.uk)

## 8. イギリスで出会った若者

後田 明日美

今回、イギリスのフィールドワークに参加して様々な場所を訪問したが、3つの場所で若者たちと交流する機会を得た。そこで考えたことについて書くこととする。

### (1) 宗教心について

一ヶ所目は、ハロー・スクール訪問である。ハロー・スクールは歴史と伝統のある有名私立学校であり、実際に見学をしてみても、歴史の長さを感じさせられる場所がいくつもあった。案内して下さった先生のお話の中で印象に残ったものがある。ハロー・スクールでは、日曜学校のほか、週に何度か教会に行き礼拝をすることが義務付けられている。日曜学校には燕尾服のような非常にフォーマルな礼服を着て、帽子を被っていくそうである。信仰心というものは個人の自由であるはずなのに、どうして強制的にしなければならないのかと疑問に思った。話を聞いてみると、どうやら少し目的が違うようである。キリスト教信者はもちろん教会に行くことになるが、その他の異なった宗教を信仰している生徒や、無宗教である生徒も当然でてくるわけである。その場合、他の宗教を信仰している生徒は同じ宗教を信仰しているもの同士が集まり、無宗教の場合も同様に集まることになっている。そして、それぞれの異なった宗教を礼拝したり、無宗教の場合は哲学について考え、教師や仲間とディスカッションをすることを通して、自分で様々な人間的課題について学ぶ力をつけるための時間となっているとのことだった。これは、他者との対話の時間であり、自分の内面と静かに向き合う習慣をつけるための時間となっている。

私はこれを聞いたとき大変驚いた。なぜなら、日本の学校では特にその様な時間を設けていないし、友達とディスカッションした記憶などないからである。時間に追われるように忙しい日々を送るだけでなく、このような精神的な素養を磨く時間をもつ大切さを知ることが重要だと考える。入学してから毎週このような時間を持っているハロー・スクールの学生は、日々どのようなことを考えているのだろうか。自分自身や周りの物事についてどのようなことを考え、自分や他者や人間の可能性とともに、力の及ばぬ事象にも想像をめぐらせているのだろうか。とても興味深い。また、ハロー・スクールでは、勉強のほかにスポーツや文化的活動にも大変力を入れているそうだ。それは、学校の目的が『一人一人の生徒について興味があることをより深く勉強させていくこと』だからだそうだ。これを聞いて、個人の個性をととても大切にしているという印象を受けた。これらの教育は、全寮制のもとで、13歳からの5年間を自立した生活を送れるように習慣づけるしくみのなかで行われている。子どもを信頼して、「一個の人格として接すること」大人や教師たちがここにはあり、それに費やされる贅沢な環境がここにはある。

## (2) ヒューマニティー

2ヶ所目に NPO の施設を訪問した。この団体は、地域に根ざした青少年教育や高齢者ケアなどの活動を中心として展開している。活動は助成金や寄付金によって賄われている。NGO の施設の見学を終えた後、実際に同年代の若者達と交流する機会があった。ハロー・スクールとは一変し、決して裕福とはいえない家庭環境の中で育ってきた青少年。普段私が日本で生活していてもそう知り合う機会があるとはいえないような人たちとの交流会と聞いて、初め正直な気持ちとして、「何を話せばいいのだろう」という不安が大きかった。ところが、実際に青少年を目の前にして、その不安は吹き飛んだ。初めの印象としては、「とても明るく、元気な子どもたち」であった。とにかく元気なのである。圧倒されるくらいの勢いで押されっぱなしのまま、交流会は終わった。交流会の間、私たちは他愛もない話を沢山した。「好きな音楽はなにか?」「学校は楽しいか?」など、普段私たちがしているような内容とほぼ変わらない。私は勝手な先入観を持っていた様である。素直に、とても楽しい交流会だった。

この NGO での訪問では、何人かのスタッフの方々が案内をしてくださったが、その方々の青少年や子ども達に対する接し方はとても印象に残った。すれ違う子ども一人一人の名前を呼んで話しかけ、笑いながら会話を交わしていた。「名前」を呼ばれることの尊厳、認められていること、誰かが気にかけていることへの安心感が、家庭や学校で無視され続けてきた子ども達への心に届く。子どもたちと対等に接していくことは青少年教育においてとても大切なことであると感じた。そのほか、この NGO では将来のことや、生活のことなど、様々な面で支援を行っているようだ。誰にでも両手を広げて受け入れてくれるこの施設があることそれ自体がとても貴重であり、ロンドンの貧困地域であるこの地区に住む人々に絶対に必要であると感じた。社会や行政の隙間に落ちこぼれた弱者救済活動を行っているこの NPO の訪問では、とても感動させられた。

## (3) グローバル・スタンダード

3ヶ所目のリーズ大学への訪問では、交流相手は比較的自分たちと同じような環境の中で生活している学生たちだという印象を受けた。授業の中で、リーズ大学の学生と「日本の責任戦争」についてディスカッションをする機会があった。実際にグループに分かれて討論は始まったのだが、私は始まってからあっけにとられてしまった。学生たちは積極的に議論を交わし、モタモタしている私たちのことはまるっきり無視状態なのである。ものすごい速さで英語を話し、私たちには目もくれない。一度、勇気を出して、「ついていけないからもう少しゆっくり話してください」といってみたにもかかわらず、議論の勢いは増すばかりであった。議論の前には自分なりの考えをまとめておいたつもりなのに、恥ずかしいことながら、一度も発言することもなくディスカッションは終了してしまっただい。ディスカッションの間、学生たちの様子を呆然と見ていたわけだが、とにかく議論の間中、誰かが発言をしている。みんな積極的に自分の意見を発表し、それに対して他の生徒がすぐ

反論する。リーズの学生たちが私たちにないし目もくれなかったのは、決して彼らが冷たいからではなく、その理由として教育制度や文化的環境の違いが関係していると思う。日本では、先生が前で話している内容を静かに聞き、学生は必死に黒板を書き写すという、受身型の授業が多く行われている。授業中に発言する学生はめったにいない。しかし、イギリスでは積極的に意見を発表する学生が多く見られ、先生と学生が対等な立場で意見を交わしているという活発な授業の印象を受けた。日本の学生はもっと積極的に授業に参加し、「授業を楽しもう！」という姿勢を持つべきなのではないかと思った。また、イギリスの社会環境として、様々なエスニック・バックグラウンドの人が暮らしているということがある。街を歩いているときも、様々な人々とすれ違う。私たちも団体でいなければ、きっとイギリスの街を歩いても目立つということはないだろう。リーズ大学も同じで、学内を歩いていると様々な人がいる。日本人らしき人も、もちろんうようよ歩いている。またリーズ大学では、大勢の留学生在が学んでいる。このような環境の中で生活しているリーズ大学の学生にとって、日本の大学から訪問した私たちは珍しい存在ではなかったし、特別に配慮を要する訪問者でもなかったのだろう。外国人だからといって、特別な扱いを受けるわけではない。意見をいえない人は、何も考えを持たない人なのだという考え方である。自分の考えを人の前で話すことができるというのはとても大切なことであり、魅力的なことでもある。これから様々な場所でこのような機会があると思うが、このことを強く心がけておくべきではないかと思った。

#### (4) 個人と個人との交流

以上のような若者たちとの交流を経て、違う国で、違う人種や民族、異なった文化や生活習慣の中で生活をしていても、根本的には私たちと何も変わらないということが一番強く感じた。ある人を「外国人」としてみると、自分とは違う文化や言葉を持っているという意識がどこかに存在して、交流をするといってもある程度壁を作ってしまうものだと思う。実際、私自身もそうであり、外国に友達がいるとしても、それは外国人としての友達という意識が強いため、自分では深く考えていなくても、その人「個人」よりもその人の国や文化に興味を持っていたような気がする。しかし、今回様々な人たちとの交流で、外国人としてではなく、その人個人として交流するともっと深い交流ができるのではと思った。その人を通して国の文化を知ろうと言うのは決して悪いことではないと思うが、「外国人」としてその人を見る以上、その人との関係を深めるのには限界があると思う。これから世界に向けて仕事をしたいと思っているが、「外国人」としてではなくその人を個人として交流していくというのは大切なことで、自分自身異文化交流をもっと楽しめるようになるのではないかと感じた。

今回フィールドワークに初めて参加したが、フィールドワークには自分で海外に行き体験するのはまた別の魅力があると強く思った。自分の興味があることについては

基本的に知識もあり、探究心も湧くが、興味がないものについては自分がホームステイなどをしている時もほとんど触れる機会はないだろうと思う。しかし、フィールドワークとなると、今まで関心のなかった場所や事柄についても接する場面が数多くでてくる。今回も、今まで関心をもったことの無いところへ行き様々な経験をしたが、だからこそ新しい発見があり、改めて興味を持った場所や事柄が出てきた。自分の興味がわからないからといって見向きもしないというのではなく、様々なことに好奇心を持つように心がけるべきだと強く思った。また、今回私は沢山「恥」をかき、自分の無知さを体で知った。自分にはまだまだ知識が必要だと思ったし、その為には勉強が必要だと思った。実際に恥をかき、勉強に対する意欲が湧いたというのは、今回の旅で得た自分自身の大きな課題の一つである。



経由地香港のプロムナードにて

## 9. パブリックスクール

### ーハリーポッターの舞台イギリスを訪ねてー

藤田 量子

ピーターラビット、不思議の国のアリスなど、イギリスの文学作品からは数々の人気キャラクターが生まれている。最近またハリーポッター（『ハリーポッターと賢者の石』から始まる全7巻の作品 J. Kローリング作）という人気者が生まれた。1997年イギリスでハリーポッターの第一巻が出版されてからその人気は世界140カ国に広まり、その読者は800万人にも及ぶという。2001年にはワーナーブラザーズで第一巻が映画化され、今年11月第二巻の上映が始まった。

私は今回のイギリスへのフィールドワークの中で、何度もハリーポッターの場面を思い出した。例えば、ハリーとハグリッドがロンドンへ行くのに使ったロンドン地下鉄。それからハリーたちがホグワーツへ向かう時に使用したキングス・クロス駅。ヨークの町並み。ここは第一巻の映画で入学準備の買い物シーンの撮影に使用された。そして、一番印象に残ったのが、同じく第一巻の映画の撮影に使われた学校、ハロー・スクールである。

ハロー・スクールはロンドンにあるパブリックスクールである。「パブリックスクール」と聞いても、それが何なのか私は全く知らなかった。日本とは異なるイギリス独自の教育制度であるパブリックスクールとは、いったいどのようなものなのだろうか。

イギリスの「パブリックスクール」とは、アメリカのように文字通りの公立学校を指すのではない。一言で言うなら「寄宿制の名門私立学校」である。パブリックスクールが誕生したのは、ウィンチェスター校が開校した1394年である。当時、教育といえば貴族の子弟が家庭教師をつけて個人的に受けるのが一般的で、公的には開かれていなかった。しかし、百年戦争やペストの流行により、人口が減り、聖職者などの人材が不足したため、貧しい家庭の子弟にも教育を施す必要が出てきた。そういった過程でウィンチェスター校が設置された。1440年には、ヘンリー6世がウィンチェスター校をモデルにイートン校を設立。このような中世起源のパブリックスクールが評判を得たため、19世紀ごろにはパブリックスクールと名乗る学校は増えていった。しかし、その多くは名前だけで十分な設備が整っていないものだった。寄宿制の制度が、私生児や先妻の子を遠くに離すために利用されたり、校長による使役労働に利用され、不信感を抱かれていたこともある。そんな中で、パブリックスクールを改革したのがラグビー校の校長トマス・アーノルドである。パブリックスクールにおける3つの柱は、寄宿制における全人格的教育、古典重視の教養主義、スポーツを通してのスポーツマンシップの育成である。その根底には「クリスチャン・ジェントルマン」という言葉に代表される宗教教育が横たわっている。最大の特徴である寄宿制の当初の目的は、地域の生徒のみならず、英国中の生徒に広く門戸を開くことにあったともいわれているが、今ではむしろ同年代の少年・少女との共同生活の中での規律や自

律心を身につけることにある。

イギリスのパブリックスクールの卒業生は、主としてオックスフォード大学やケンブリッジ大学に進学する。ただし、イギリスの教育システムは複線式で、日本のように高等教育が大学に一本化されているのではない。またスポーツや文化芸術活動（オーケストラや演劇）も推進されている。パブリックスクールの教育は人格形成に主眼をおいているといえよう。オックスフォード大学・ケンブリッジ大学への進学率の高さを見ると授業の内容も密度が濃いものであるだろうが、パブリックスクールが最も期待されているのは、社会に貢献することを自らの責務として自覚する指導者の育成なのである。

「ザ・ナイン」と呼ばれる9つの名門パブリックスクールの中に、今回訪れたハロースクールが入っている。残りの8つは、ウィンチェスター、イートン、セントポールズ、シュルーズベリー、ウェントミンスター、マーチャント・テラーズ、ラグビー、チャーターハウスの各校である。ハロー・スクールは500年以上の教育の歴史と、その中で先生と生徒が共に培ってきた伝統で知られる。16世紀に英国国王の特命によって、オックスフォード大学・ケンブリッジ大学に優秀な学生を送り込むことを目的として創設された。それ以来、チャーチルなど27人もの英国歴代首相をはじめとするリーダーを出してきた。

パブリックスクールについて調べて、そんなに小さい頃から親元を離れて寮に入るなんて、私にはとてもできないなというのが正直な感想である。イギリスにおけるパブリックスクールと、今まで私が日本で受けてきた教育を比較して、やはり最大の相違点は生徒が学校に居住しているということだ。そして、教職員も学校の敷地内やその近くに居住している。寄宿制には、上級生による下級生いじめや、上流階級のための閉鎖的空間に育った生徒の他の階層への無理解などといった問題が指摘されることがあるが、こういったことを除けば、集団生活での規律や自律心を身につけられたり、学年が上がれば下級生の面倒をみるようになり、指導者としてのリーダーシップを学ぶことができ、メリットの大きい制度であるといえよう。パブリックスクールの教育はイギリス中で支持されているが、実際入学できるのは高額な授業料を支払える家庭の子に限られてしまっている。ごく一部の学校では、70人の生徒が授業料相当の奨学金を受けられる制度があるが、やはり大半は裕福な家庭の子である。すばらしい学びの場があってもその機会が限られた人にしか開かれていないというのは悲しいことである。

#### <参考文献>

パブリックスクールにおけるイギリスのエリート教育

<http://www.geocities.co.jp/HeartLand-Kevaki/8451/sekai/elan-vital4.html>

AIEE 国際教育交流促進協会

<http://www.aiee.ar.jp/country/britain.html>



## 10. 老人ホームを訪ねて

赤瀬真弓

### (1) 高齢者福祉制度

イギリスは世界で最も早く社会保障制度が確立し「ゆりかごから墓場まで」つまり生まれてから死ぬまで福祉制度がサポートしてくれると言われている。しかし、それはもう過去のことである。なぜなら 1979 年に経済の競争回復のため、高齢者福祉の切り詰めを行ったからだ。では日本と変わらないのかということそうでもない。イギリスは過去 30 年の福祉国家という蓄積があり、「高齢者を寝かせきりにせず、住み慣れた地域に最期まで住み続けることができる」という最低限の福祉を国が保障している。そのしわ寄せが多少残っているものの、現在高齢化率 15.7% (1996 年) であるイギリスは様々な政策を打ち出し、「ゆりかごから墓場まで」の社会に近づいている。1993 年以来、在宅福祉の対策の重視、効率的な福祉サービスの提供の観点からコミュニティ・ケア改革を実施しており、何らかの理由で介護が必要になっても、出来る限り地域または家庭的な環境で生活が続けることが出来るように本格的に進められている。

### (2) イギリスの高齢者と日本の高齢者

日本の高齢者と比べると、イギリスの高齢者はいくつかの異なった特徴をもっている。その第一は、イギリスの高齢者の労働率が日本に比べてきわめて低いということである。年金支給開始年齢の 65 歳になると、イギリスでは多くの人々が年金と自分のそれまでの貯えによって暮らすようになる。老後は社会保障に頼るという考えが日本よりも強いのである。第二に、家族との同居のあり方も日英では決定的に異なる。日本では息子夫婦と同居する高齢者の比率は非常に多く、一人暮らしの高齢者は少ない。これに対してイギリス人は老後を子ども達にみてもらおうという意識はもっていない。イギリスの二世帯同居率は 1 割にも満たない。大半は老夫婦のみで生活しており、そして 75 歳以上でも自宅暮らしをしている男性の 30% と女性の 50% が一人暮らしである。日本の高齢者に比べて個人主義が徹底しているのである。しかし、このことが高齢者とその子どもの断絶を意味しているわけではない。別居はしていても近くに住んでいて親子が頻繁に行き来することが多いからだ。第三は、社交性の相違である。日本の高齢者に比べて、イギリスの高齢者の方が宗教活動や社交的集いや趣味の集いなど、社会活動の参加率が高い。また近所の人々との付き合いの程度も高い。イギリスでは高齢者が子どもと同居することは少ないが、子どもと顔を合わす頻度は決して日本に劣っているわけではないし、また、近所の人々との交際も日本よりはるかに頻繁である。イギリスの高齢者にとっては、コミュニティというものの持つ意味が非常に大きいのである。こうしたことを反映してか、孤独を感じない高齢者の比率もイギリスの方が圧倒的に高いし、高齢者の自殺率も男女ともイギリスは日本の半分以下である。

このようにイギリスの高齢者は、日本の高齢者に比べて年金制度をはじめとする社会保障に頼る傾向が強く、個人主義的な生活スタイルを貫いており、しかもコミュニティでの社会参加に対して積極的である。このためイギリスの高齢者向け対人社会サービスも、こうしたイギリスの高齢者の社会的性格を反映している。

親子の同居率が少なく、社会保障に頼る傾向が強いという点、イギリスではさぞかし多くの高齢者が老人ホームで暮らしているのだらうと考える人もあるかもしれないが、事実はこれに反している。老人ホームなどの施設で暮らす高齢者はおそらく 65 歳以上人口の 5%未満であり、大多数の高齢者は、他の年齢階層と同様に自宅で暮らしているのである。したがって、イギリスの高齢者向け社会サービスは、これらコミュニティのなかで暮らす人々に対するものが中心となる。

### (3) 在宅サービス

イギリスでは、加齢に伴って健康状態が優れず自立が困難となった場合でも、高齢者がこれまでと同様、コミュニティ内部で生活を続けることが出来るように援助がなされる（コミュニティ・ケア）。他者からの世話が必要となった場合は、まず最初に自宅において様々な在宅サービスを利用することが検討される。一般的なイギリスの高齢者は、子どもが巣立ち、夫婦あるいは一人暮らしになると高齢者が住みやすいように設計されたアパートに転居する人が多い。それらは sheltered housing と呼ばれる集合住宅で、アラームや 24 時間体制の管理人を常備している。町の中心部や商店街に近く、交通至便なところを選んで建てられているのは、社会と密接なつながりを保とうという狙いからである。

ソーシャル・ワークやホームヘルプ・サービス、自分で食事を準備することの出来ない高齢者のために食事の配達を行うミールズ・オン・ウィールというサービスもある。

### (4) 老人ホーム

イギリスの老人は病気や老衰でいよいよ独居が難しくなってくると residential care home や nursing home といった老人ホームや老人病院へ移る。これらは私立や公立、あるいは慈善団体によるものなど多種多様であり、費用も無料から大変な高額までいろいろだ。民間企業が経営する老人ホームは全体の 6 割をも占めている。かつてはこういった施設での介護費用も国民保健サービス（NHS : National Health Service）により無料であったが、高齢者人口の増大により生涯福祉制度の見直しを迫られた政府は、老人の長期介護費用を自己負担させる方針に切り替えた。イギリスにおける介護費用はかなり高い。老人ホームの入居料は、所得や資産も充分にある健康な高齢者の場合、月額 1000~2000 ポンド（約 20~40 万円）である。この額が払えない場合は、16000 ポンド（約 320 万円）以上の資産保有者は、その処分を求められる。その資産もなくなれば、週約 10 ポンドの小遣いを除き、年金から入居料が天引きされる。また公的部門の

高齢者福祉施設よりも民間非営利部門のそれの方が高い水準のサービスを維持できるし、行動が自由なため、創意工夫して入所者のニーズに応えやすいし、民間非営利部門全てに当てはまるわけではないが、公的部門に比べて入所者が社会経済的に、あるいは民族的に非常に似通った人々からなることが多い。今回のフィールドワークで訪れた老人ホームはユダヤ人のコミュニティ内にあり、入所者は全てユダヤ人であった。このような少数派のコミュニティがイギリス流の自立した生活が出来ない人のために老人ホームを作ることもある。そして、同じコミュニティに住む老人が共に暮らし、互いに刺激あって生活している。

#### (5) 日本の高齢者福祉

日本は世界一の長寿国でありやがて世界一の高齢者大国になると予想されている。そして今、寝たきり老人が激増している。しかし日本の高齢者福祉は他の先進国の中でも最もレベルが低いようだ。この理由は日本の福祉制度が高齢者の人権を無視しているからではないだろうか。身体が不自由になると「寝かせきり」にされがちで、人間らしい老後が送れないのが現状なのである。日本とイギリスの老人ホームの違いは「ベッド」と「いす」の違いである。イギリスの高齢者は、ほとんど一日を広場のソファで過ごす。一方、日本の高齢者は、ベッドの上で過ごす時間がほとんどである。テレビを見たり、本を読んだり、編物をしたり、やっていることは同じなのだが場所が違う。できるだけソファに座っている方が身体にいいし、イギリスの高齢者は食事の時も食堂でみんなと一緒に食べたり散歩したりなど、出来るだけ身体を動かすようにしている。日本の高齢者は足腰が不自由になるとすぐに横になり、足腰が弱りやすく、「寝たきり」の老人が増えるのだろう。また、イギリスの老人ホームでは、高齢者の「介護」と言うよりも、入浴や着替えなどの「手助け」をするようにしているらしい。施設の造りも日本とは違い、広くて明るい家庭的なロビーや食堂、バス・トイレ付きの個室があり、みんなで年中行事をしたり、家族の訪問を自由にしたりなど外とのつながりを作り、お年寄りを孤独にしないように社会的な環境を作るようにしている。

日本の福祉制度はお年寄りに非常に冷たいのが現状である。日本人は同居率も高く、親の面倒は家族で見るという意識が高かったが故に、福祉制度に対する国民の関心が低くかった。その結果、「寝たきり大国」になりつつある。家族の愛や忍耐だけでは「寝たきり大国」は救えない。本当の敬老社会とは、家族がお年寄りを大事にするだけでなく、福祉社会が充実している社会をいう。また老人ホームなどの施設がイギリスのようにお年寄りの住み慣れた地域にあれば家族や友人が頻繁に訪ねられるし、もっと部屋の雰囲気良ければ孫を連れて遊びに行きやすい。建設費用の国庫補助が少なく、街外れに建てられるから、家族や友人とのつながりが途絶えてしまう。日本はイギリスや北欧などの福祉制度を参考にしながら、福祉制度をもっと充実させるべきであるし、コミュニティの力を育てるべきだと感じた。(参考文献省略)

## 11. リーズ大学言語センターを訪ねて

船曳朋子

### (1) センター見学

リーズ大学言語センターは、留学生のみならず言語を学ぶすべての学生が利用でき、40カ国の語学学習ができる施設である。このセンターには self access room とよばれる自習室、language-teaching room という授業や会議などに使用される多目的教室、そしてイギリスの大学では最先端技術を採用した通訳・翻訳実習 laboratory がある。EUの会議で使用される言語が数多くあるため、それらに対応できる通訳者が必要となったためである。

私たちはまず self-access room を見学した。そこにはカセットデッキやビデオデッキ、パソコンなどが十数台並べられ、学生たちは自由に世界各地のニュースや情報を得ることができる。私たちが訪れた日も多くの学生たちが利用していた。そのニュースや情報はスタッフによって毎日更新されていて、学生たちは常に世界各地の最新の情報を得ることができるようになっていて、ここでは留学生などが自分の母語でニュースや情報にアクセスすることはせず、常に外国語学習をすることが原則となっている。

次に language-teaching room へと移動した。このセンターには language-teaching room と呼ばれる教室が3つあり、その教室の1つを見学した。この教室は会議室のようにU字型に机が配置されていて、周りには数台のパソコンが設置されていた。そこで見せていただいたホワイトボードの利用法には驚かされた。パソコン画像を映写したボード上で、直接情報が操作できる。つまり、パソコン画面を操作してそれを投影するのではなく、投影され拡大された画像の方を操作して、パソコンに命令をすることができるようになっていた。ホワイトボード上に文字を書いたり、その文字を移動させたり、またパソコン内に取り込んで加工したりといったこともできるようになっていた。これだと、教える方も学ぶほうも、ボードを見て学習しやすい環境がつかれるそうである。

次に、通訳・翻訳の学習をする教室を外から見学した。ちょうど私たちが訪れた時、学生たち10人ほどが授業で利用していて、自分の同時通訳をカセットに録音し、それを添削するという作業を行っていた。国際化が進む中で、これからは英語やフランス語、ドイツ語といった主要言語の通訳・翻訳だけでなく、様々な言語を通訳・翻訳できる人材が必要とされるということもあり、ここでは多国の翻訳・通訳の学習に力を入れているようであった。

私はこの言語センターを見学して、多国の言語学習ができ、常に世界各地の最新の情報を手に入れることができる充実した環境が用意されている学生たちをうらやましく感じた。多くの学生たちがこのセンターを有効に活用しているところから、このセンターがよく機能しており、活動が成功している様子が感じられた。学ぶことに対して実に意欲的な学生たちに対応できるだけの十分な教育設備がこの大学にある。そして、

self-access room や language-teaching room のように、最新の機材や設備を完備し導入している先進的な部分もあれば、一方で歴史的建造物である図書館の一部を昔のままの状態に保存し大切にしているというように、伝統や文化を重んじる部分もあり、便利で近代的なものと昔ながらの伝統の両方を上手に取り入れているこの環境に、とても魅力を感じた。そして、このようなところに、先進的な面と伝統的な面の両方を合わせ持つイギリス文化が見えてくるような気がした。

## (2) 留学生への英語教育

リーズ大学に留学している日本の学生から、ここで留学生に対して行われている英教育の取り組みを聞くことができた。イギリスの大学では一般教養過程の履修はなく、すぐに専門分野の勉強が始まる。従って、留学するには、ある程度の英語力を身につけて専門的な正規のコースに入ることが必要となる。他大学と同様にリーズ大学においても、専門分野の勉強に入る前に、英語力に不安のある学生や条件となる英語スコアに達していない学生たちのために、英語集中コースが設けられている（一般的には、TOEFL で 530 点、または IELTS で 5.5 以上あることがイギリスの大学に留学するにあたって必要な英語力とされている）。大学の講義と同じように、週末以外の平日に英語の講義が行われている。ここでは、文法といった基本的な英語学習から、ディスカッションやプレゼンテーション、エッセイなど、自分の意見を英語で表現する力をつけるような学習までの講義が展開されている。日本人学生の話によると、留学生たちはこれらの授業に十分な予習や復習の時間をとるように求められているとのことだった。

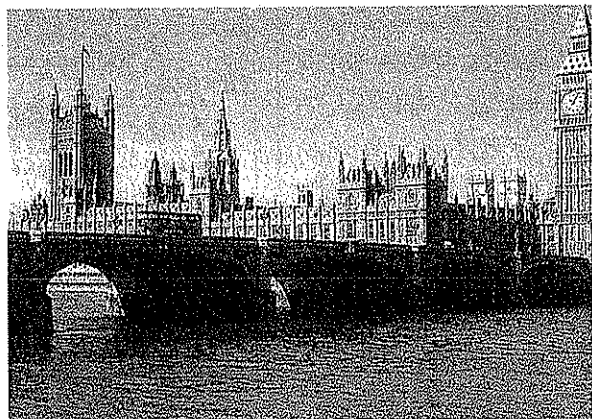
ある程度の英語力をつけて正規のコースに入ってから、リーズ大学では英語のサポートが提供されている。週 4 回一時間程度、ランチの時間に受講したい人のみが英語の講義を受講し、文法やエッセイなど書くことを中心にした講義が行われる。英語集中コースとは異なり課題はほとんど出されず、予習や復習といった時間はもたなくてよいことになっている。だが、週 4 回というのは、ほとんど毎日参加してさらに英語力を伸ばすことも可能だということである。今回、イギリスの英語教育について調べてみて感じたのは、内容とともに、英語教育の時間の取り方における日本との違いである。英語力を伸ばすためには英語と関わる時間を十分とることが重要だとは思っていたが、日本の英語教育は英語に触れる時間が極めて少ない。これは他の外国語教育についてもいえることで、自習のための教材や自習ができる場の提供など、外国語を学ぶ環境に大きな差がある。日本の場合、多くの学生は講義外で英語や外国語の勉強することはほとんどないが、リーズ大学では英語集中コースや外国語 (modern languages) 集中コースのように、一定の期間集中的に学ぶ環境に学生たちが置かれる。日本からの留学生の話を知っていると、英語に触れる時間の他に、日本とイギリスでの英語力の向上に差が出る決定的な要因が見えた。それは、学生たちの英語に取り組む姿勢である。イギリスの授業に参加してみてわかったことだが、彼らは実に学ぶことに意欲的である。そんな中に

放り込まれた留学生もまた、受け身的な学習ではなく、自分の意思で積極的に課題に取り組んでいた。彼らの学びの中には、楽しさや充実感が感じられた。また、学びへの意欲的な姿勢は、学びだけに限らず日常生活の中にも現れていることを感じた。留学生を含めイギリスの学生は、実にエネルギッシュでバイタリティーがあり、積極的にいろいろなことに興味をもち、興味をもったことにとことん打ち込む。その結果、彼らは経験や知識という大きなものを自分で獲得している。

今回のフィールドワークでわかったのは、一番大切なのは学生一人一人が英語力を高めようという意欲的な姿勢をもつことであり、大学がそういった環境を提供すべく教育内容や施設を充実させることだということだ。私は、彼らとの交流を通して、英語学習をはじめ、物事に対する意欲的な気持ちや、まず挑戦してみようというチャレンジ精神をもつことの重要性を学んだ。



テムズ川沿いに建つグローブ座



議会を見学した国会議事堂

## 12. イギリスでの留學生活

木原麻貴

リーズ大学で出会った日本からの留學生に、イギリスでの留學生活について聞いたことをまとめてみたい。リーズ大学への訪問を終えた夜、イギリス人学生や、アメリカなどからの留學生、そしてリーズ大学に交換留學生としてきている日本人学生や、自らの意思でここに留学してきた日本人学生たちがパブに集まってきてくれた。自由な交流でにぎわう中、いろいろな話を聞いてみた。

### (1) 留学の動機

まず初めに、なぜ留学先としてイギリスを選んだのかという質問をしてみた。主に4つの理由があるとのことだ。1つ目は、世界的に教育制度が評価されているから。2つ目は、留学先としての教育機関がたくさんあるから。3つ目は、長い歴史をもつこの国の文化を学びたいから。4つ目は治安がよいから。他には、短期留学をした際に、イギリスという国が好きになったからという意見もあった。リーズ大学で日本語を専攻する学生は3年次に1年間日本への留学が義務付けられている。交流会には、今から日本へ行く期待に胸を膨らませている学生も、既に1年間の留学を終えた学生もおり、イギリス人から見る日本の姿についても話を聞くことができた。彼らが日本のことを本格的に学ぼうと思った理由としては、高校までの授業で日本のことをいろいろ勉強する機会があり、日本文化や日本人に興味を持ち始めたからという意見が多かった。イギリスでは日本のマンガを時々目にすることができたし、小中学生の間で日本のマンガが流行しており、マンガを日本語で読んでみたいという子どもたちが増えているとのことだった。いろいろなマンガを通してイギリスの若者達が日本に興味を持ってくれるようになればさらにいいなと思った。

イギリスは美術・音楽・演劇といったアート&カルチャー分野の教育水準も高いので、芸術方面に興味のある人にとっては魅力的だと聞いていた。これらの留學生たちは、ロンドン周辺に集中しているらしい。ロンドンの街並みのウィンドウ・ディスプレイや、あちこちで見かける数々のすばらしい建物などから、普段の生活からも得るものがたくさんあるのではないかと思う。振り返ってみれば、日本でも昔の風情を残している場所はたくさんあるので、そういった面ではイギリスと同じくらい良い勉強場所があるのではないかとも思う。ロンドンでは大道芸人もいたところで目にすることができた。大道芸人は行き交う人の目止めようと、様々な芸をしていた。本格的に芸をしている人もいれば、ちょっとおかしなギャグを売っている人もいた。クラシックやアンサンブル演奏をやっているグループもあれば、パントマイムや新しい演劇らしいものを試みている人もいた。すべての人の芸が素晴らしかった。現在のイギリス留学の現状として、留学手続きの簡略化や、就労規制の緩和も行われているので、イギリスへの留学はますます

身近なものになると考えられる。

## (2) 留学の種類

留学の種類を大きく分けると、中学・高校レベルから大学・大学院までのアカデミックな留学（正規留学）や、ホームステイ・交換留学などの留学（短期留学）、語学・専門技術を身に付ける留学、そしてワーキング・ホリデーの4種類がある。大学の受験資格としては、十分な語学力（IELTSで6以上、又はTOEFL550以上）と大学の2年までの終了証明または短大卒業資格などが必要である。しかしそれらは受験資格であり、必ず入学できるというわけではない。最近では各大学に留学生のための入学準備コースが設けられているので、高校卒業後そのコースを経て大学へ入学することもできる。入学準備コースや語学学校では、個々の英語のレベルに合わせたクラス選びもできるとのこと。語学学校での生徒の国籍はイタリア人が1番多く、日本人、スペイン人、ドイツ人、フランス人と続く。また、語学学校でも学費は様々で、学費が高い学校には日本人が多い傾向にあるとのことだった。リーズ大学では、例えばTOEFLのスコアが550点数以上であれば、正規の授業を受講できるとのことだった。ここでは世界中から集まってくる留学生のために、約50カ国の言語から英語を学ぶことのできる教室が設けられていた。また、TOEFLの点数が550点に満たない人も、550点に達するまで準備コースなどで勉強できるとのことだった。リーズ大学への留学生の国籍は100カ国以上にのぼり、近年一番多いのは中国になっているそうである。日本は10人程度と少ないらしい。イギリス人教師の話では、年が経つにつれて、留学してくる学生たちの英語力が高くなっているとのことだった。留学生の相談室もきちんと設置されていた。留学生にとっては、相談室の充実というのは大切なことなのではないかなと思った。また、世界各国から留学生が来ているので、イギリス人の友達はもちろん、たくさんの国の友達ができるのではないかなと思った。

## (3) 大学生活

授業内容はとても充実している（実情として、留学生には英語能力不足で授業が分からないことも多々あるとのこと）。平日は予習と復習、休日はレポートや課題ととても忙しい毎日になるそうだ。もちろん、そんな中でも時間を上手く使い、休日を楽しんでいる人も多くいるようだ。休日は1週間分の買い物をしたり、家でリラックスして過ごすのが一般的だそうだ。実際私が出会った留学生たちは、「授業はたいへんだが、すごく楽しい」と言っていた。英語の上達を図るために何か特別なことをしているのか聞いたところ、「友達をたくさん作り、自分から積極的にみんなに話しかけていくようにしている」とのことだった。日本人はよくシャイだと言われるが、もし本当に交流を深めたいのならば、自分から話しかけていかなければならないと思った。また留学生に、「日本の大学生は他国の大学生と比べて勉強してないとよく耳にするのだが、本当のところ



はどうなのか」と聞いたところ、「日本とイギリスの学生を比べると、残念ながらそれは事実だ」と言っていた。同時に、「一般的に言って、日本の学生はイギリスの学生に比べて時間の使い方が下手だ」とも言っていた。一体イギリスの学生がどんな時間の使い方をしているのか興味がある。リーズ大学では日本語を学んでいる学生が多くいる関係で、休日などはそういったイギリス人学生と日本人留学生たちがホームパーティを開いたりすることもあるとのことだった。交流会のときも、「来週末にお好み焼きパーティを開くから来ないか」と誘い合っていた。いろいろ話を聞いたが、すごく楽しそうだった。

#### (4) 住まい

住まいについては、主としてホームステイ・学生寮・フラットシェア・ハウスシェア・ベッドシット・ステュディオフラットの6種類がある。この多くは、1週間100ポンド前後で借りられるそう。留学生にはフラットシェアやハウスシェアが1番の人気の、2番目はベッドシットのような。前者は何人かの学生たちで共同生活のようなかたちをとることをさし、後者は一人で簡素なアパートに住むことになる。前者では維持費や生活費、光熱費などをシェアリングすれば安くなるので、お金の節約になるが、共同生活のルールも必要になってくる。ホームステイでは、中にはお金目当てに多くの留学生を受け入れ、B&B状態になっているホームステイ先もあるようなので注意が必要らしい。一般のイギリス人学生にも多くの場合当てはまることだが、一年目の学生はほとんどの人が学生寮に入る傾向があるらしい。「日本にはコンビニなどがすぐ近くにあって、本当に便利な国だよ」とイギリス人学生に言われた。確かに、24時間開いているコンビニのない生活は不便かもしれないが、その代わりに、友人同士で生活を分かち合う楽しみがありそうな気がし、シェアリングなどというのもぜひやってみてみたいと思った。

### 13. 日本語を教えるということ

佐高宏美

英国における日本語教育は19世紀終盤の日本の開国期にまで遡ることができる。日本に赴任した外交官たちによる日本の言語・文化研究の成果として、口語辞書・文法書等の出版が記録されている。1921年に日英同盟が終息すると、中国大陸における植民地政策の利害対立による両国の敵対もあり、第二次世界大戦初期まで日本語教育は影を潜めるが、開戦後いわゆる敵国研究の必要性により、再び日本語に目が向けられるようになった。戦後、主として国際問題への国家的対応のための学問基盤を整える観点から、イギリスの名門大学に日本語講座が設けられていく。そして日本の経済発展により、商業や外交といった国際社会の場で日本が重要視されるにつれ、イギリスの日本への関心も深くなっていったのである。他にも、イギリスで放送されている日本のアニメーション、イギリスで活躍する日本人スポーツ選手なども、日本語学習熱の要因になっていると考えられる。実際、リーズ大学で日本語を学んでいるイギリス人の学生に「なぜ日本語を学ぶのか」と聞いたところ、「日本のゲームに興味があるから」という答えもあった。イギリスの若者が、日本または日本の文化に興味を持ってくれることで、イギリスでの日本語教育がこれからも盛んになっていってほしい。

イギリスで日本語教師という職に就くためには、労働許可証と移住権が必要である。現在では、イギリス国内で日本語教師の資格をとることが出来る大学が増えており、日本語教師のポストは、労働許可証のない外国人よりもイギリス人に与えられてしまうことが多くなっているそうである。ちなみに、資格を持っていることは当然有利だが、実力がものをいうこの社会では、資格があるだけというのもあまり意味がないため、経験も問われる。そしてイギリスで日本語を教えるためには、何よりも英語力が要る。授業中、教師が日本語で話すことは大きなメリットがあるとはいえ、生徒からの質問を理解し、文法的なことを英語で解説することができなければならない上、『謙遜』や『孝行』など西洋にはない言葉について文化的な背景まで説明できなければならないからである。そのためにも、日本の伝統や古典芸能を学び、なぜ日本人はこうなのか、なぜこう考えるのかを知っておく必要があるのである。日本語を教える前に、日本文化や日本社会について知っておかなければならないが、日本語を教えることを通して日本を再発見することもあるだろう。教える立場にある側が、教えることを通して実は教えられていることに気づかされる時、本当に日本語を教えることができるのではないだろうか。

日本語を全く知らない人に、日本語を教える上で一番大事なことは「ガッツ」であると、この旅で学んだ。英語はもちろん、もう一カ国語を話せることが理想と言われているが、「言葉と言葉の戦争」である語学教育の場で、探究心の塊である生徒に自分の言いたいことを伝えるのはパワーのいる作業である。頭で理屈を考えるより、伝えたいと

いう気持ちを前面に押し出して、ジェスチャーや絵を使って理解してもらうのである。  
「日本語を教えることは日本文化を教えること」。これはハロースクールで日本語を教えている高田先生の言葉である。そして「受身ではなく、何をしたいか、どうしたいのかを考えなくてはいけない」ともおっしゃった。日本語を教えるということを通して、教師も生徒も、日本語や日本文化だけではなく、他の地域にも興味をもって国際理解や異文化理解を進めていくことにつながっていけばと思う。

<参考文献> <http://www.andoando.com/andi/Diary2.html>

<http://www.jpj.go.jp/j/urawa/world/kunibetsu/1999/uk.html#JISSHI>



ハロースクールの制服の一部となっている帽子。左側は授業のある日に被るもの。右側は日曜日に被るもの。

(映画ハリーポッターが撮影された教室にて)

## 14. イギリスにおける日本語教育

武村 美和

はじめに

私は、今回のイギリスへのフィールドワークにおいて、「イギリスにおける日本語教育」について調べてみた。私がこのテーマを選んだのは、日本語教師の免許を取得して海外で働くために、自らも現在勉強中であるからというのが1番の動機だ。しかし一方で、今まで私は、広島留学生センターや山口大学の留学生会館など、日本で日本語教育を行っている機関においては、ボランティアとして自ら教えたり、日本語教師の方々が教えているのを見た経験があるが、海外で日本語が教えられている様子は全く見たことがなかった。そこで、今回のフィールドワークを通じて、日本から遠く離れたイギリスで一体どのような日本語教育が行われているのかその実態を知り、日本語教師を目指す私たちはどのようにあるべきかを考察したいと考えた。

まず初めに、日本語教師の養成に携わっている「英国国際教育研究所」、次に中・高等教育が行われている「ハロー学校」、そして最後に「リーズ大学」における日本語教育について、講義を聞いた内容や実際に見た授業風景、教師の方や生徒にインタビューした内容をふまえて述べたい。

### (1) 英国国際教育研究所

英国国際教育研究所は、英国のロンドンに本部を置く国際教育研究機関であり、様々な教育機関の集合である。ここには、大学院日本語教育学研究科があり、これは英国のケンブリッジ大学およびグリニッジとの共同開発による世界レベルの大学院過程である。ここでは、所長の図師照幸さんの講演や、キャンパスについての説明を聞いた。実際に日本語を教えている現場ではなかったが、日本語教師を育成する機関がどのような考えの基に育成を行っているのかを知る良いチャンスであった。

図師さんの考える異文化理解とは、「異なるものの正確な理解を通して、その異なるもののなかに人間存在の普遍なるものを見出す力（知性）の育成」であり、自国とは違う異文化のめずらしさにただ感嘆の声を上げるのではなく、そのめずらしさが国内では得られない、新しいまなざしや角度を得ることのできるものかどうかであることが重要であるという考えだった。図師さんの講演は、日本語教育の範囲にとどまらず、異文化理解や、日本における英語の早期学習についても及び、これらの問題に対して、我々に新しい価値観や考え方を発見させるものだった。

図師さんの講演の中に、大学入学前に受ける GCE、A レベルの試験の中にある日本語の試験の問題文を見たとき、私はひどく驚いた。なぜなら、その試験問題の文章は、今だに「言う」が「言ふ」と歴史的仮名遣いであったり、漢字は現在の略体字ではなく、旧体のままで、まるで古文のような文章が、現代の日本語として出題されていたからだ。

さらに、図師さんによると、この古いテキストを改正しようとする動きはあまりないそうだ。そして、これは日本が自国をきちんと知ってもらおうとするアピールをしないことに原因があると指摘していた。今や日本は世界の国々の中でも無視できない大きな存在であるにもかかわらず、そのことをあまり認識していないし、また自国を知ってもらおうと、アピールすることも下手なようだ。確かに、イギリス人は日本や日本人にあまり関心がないことを今回のフィールドワークでたびたび感じた。これは、日本人のアピール下手にも関係しているのかもしれない。そう考えると、これらを改善する上でも、日本語教育は重要なのではないだろうか。

## (2) ハロー学校

ハロー学校は1572年に創設された歴史ある学校で、全校生徒800人に対して11の寮を持つ全寮制の男子校である。この学校は、映画『ハリーポッター』の舞台となったことでも有名で、卒業生にチャーチル首相など、世界のリーダーとして活躍した偉人を多く誇る名門校である。ここでは中・高等学校の教育が行われている。ここでは、日本語を習い始めて、まだ3ヶ月くらいだという生徒と、1年は習っているという生徒の2つのクラスを見学した。また、教えているMs Hisako Takadaの話聞くこともできた。

授業は、中・高校生を相手にした授業ということもあって、ゲームなどを交えて楽しく日本語に触れるという感覚の授業なのかと思ったら、どちらかという、私たちが大学で外国語を学ぶときのように、彼らの母語(英語)で意味や文法を説明して、手本の発音を示し、それを真似て生徒が発音し、練習問題を重ねながら覚えていくというものだった。しかし、カタカナ、ひらがな、漢字は、絵を使って覚えるという方法をとっていた。私は、日本の中学や高校で行われている、ネイティブスピーカーの英語の先生による授業のように、会話やその国の文化の紹介も交えたような日本語の授業を予想していたので、少し面食らった。その一方で、日本の英語の授業で、日本人教師は文法や構文、ネイティブの先生は発音という様に、2人がかりで教えるところを、イギリスの日本語の授業は1人の先生がすべてを教えることを考えると、日本語教師に求められるレベルの高さを改めて感じた。そうはいつても、英語と日本語では、明らかに比重が違うし、イギリスにおいても、日本語はまだマイナー言語で、第2、3外国語として学ばれることがほとんどであるので、そのせいもあるだろう。

イギリスでは日本人教師よりも、日本語教師としてイギリス人が好まれるということを知ったのだが、やはりそれは事実のようだ。なぜなら、イギリス人教師なら、他の教科と併せて教えることができるからだ。そのため、日本人教師も、2ヶ国語(特にフランス語)以上話せたほうが好ましいようだ。Ms Takadaの話の中で最も興味深かったのが、「ここでは、言葉と言葉の戦争だ。黙っていたら意見のない人だと思われる」ということだ。また彼女は、「イギリスにいるなら、西洋人のようにならなくてはいけない。日本にいるときのように受身のままでいて、ものごとがいつの間にか

うまくいっているということはある得ない」とも述べていた。このことは、今回のフィールドワークでひしひしと感じたことだった。黙って慎ましくしていたら、誰かが話しをふってくれるというのは、日本人ならではの甘えた考えで、イギリスでは、どれだけ人に自分の意見を伝えられるか、そして納得させるかが最も重要で、そのためのチャンスは自らが作り出すものだと考えられているのである。日本語教師として海外で働きたいのなら、このような文化の違いについてあらかじめ理解しておくとなかなか様々な面で役に立つだろう。そして彼女は、イギリス人が日本にあまり興味がないことに関しては、イギリスには外国人が多いため、イギリスにいれば何でも知ることができることを理由に挙げて、「日本人に限らず外国に興味がないのではないかと述べていた。事前学習で、「英国は、欧州で母国語以外の言語を話せる人の割合が最も低い国と言われている」とあったが、それはこのことと深く関係しているのではないだろうか。

イギリスにおいて、日本語はまだマイナー言語で、ハロー学校で学ぶ生徒も多くないようだ。そこで、例え第2・3外国語としてでも、なぜ日本語を勉強しているのかという質問を生徒にしてみた。すると、「日本のゲームやマンガがおもしろいから」という返事が返ってきた。私は今まで、「外国語を習得すること＝ビジネスで役立てたり、仕事で活用し、お金を儲けるため」という考えを持っていた。しかし、彼らの中では、新しい言語を習得することはお金儲けと結びついてはいなかったのである。確かに、外交は英語で十分対応できるし、日本語を学ぶ意味やメリットはないのかもしれない。けれど、彼らの日本語学習能力は非常に高く、授業のレベルの高さには目を見張るものがあった。直接の明確な目的がないのに、これだけの意欲や成果を出せるのは、私からすれば信じられないことである。だが、これこそが、本当の意味で教養のために言語を学んでいると言えるのではないだろうか。そして、この姿勢が本来のものごとを学ぶ姿勢であるように感じた。

### (3) リーズ大学

リーズ大学は、もともと科学系が有名な大学で、現在では医学・経済・modern languageが有名である。日本の大学とも提携を結んでおり、日本から交換留学で来ている学生も数多くいる。ここでは、東アジア学科の日本語の授業を見学した。

ここでの日本語の授業は、4年間日本語を勉強している大学4年生の学生を対象としたものを見学したので、授業はほぼ日本語で、生徒たちは、カタカナ・ひらがな・漢字は一通り書けるようだった。また、会話力も十分で、ほとんどこちらが気を使うことなく話せて、受け答えも大変スムーズだった。この日の授業では、英語で書かれた日本の環境問題に関する記事を日本語訳するというものだったが、内容が大変難しく、専門用語などもたくさん出ていた。また、宿題に、その記事に関連して、「自分の考える環境問題」について600～800字程度、日本語で書いてくるというものもあった。この授業では、テストも頻繁に行われ、宿題もかなり多いようだ。しかし、全員が提携を結

んでいる日本の大学に3年次で留学しているので、学生は意欲的に授業に取り組んでおり、上達も速いと言えるのではないだろうか。

おわりに

私が今まで日本語教師という職業に魅力を感じていたのは、日本人である自分だからこそネイティブ教員になれて、「日本人である」ということがメリットになる職業だと思ったからだ。しかし、今回のフィールドワークを通して、日本人であること、日本語が話せることは、それだけではたいした意味を持たないことを痛切に感じた。日本では、英語の先生としてネイティブスピーカーである外国人教員が好まれるのは、単に日本人の英語先生の質が低いからであり、イギリスではむしろ、日本語と英語、もしくは日本語くらいしか満足にできない日本人教師よりも、他の教科や何ヶ国語も話せるイギリス人教師の方が好まれるのが現実のようだった。このように、日本語教師というと、日本語ができる人なら誰にでもできそうな職業に感じるが、日本で教えるならともかく、外国で教えるには何かプラスになるものがないと採用は難しいようだ。

一方で、外国に行って日本語を教える上で最も必要なのは、日本や日本語に関する知識である。それゆえに、これからの日本語教師には、何よりも自分の母語を勉強しなおすことと、外国語を話せること、自分だからこそできる何かプラスになるものを身に付けることが必要であると、このフィールドワークを通して学んだ。

## 15. イギリスの日本語教育について

村本実加

今回、十日間のイギリスへのフィールドワークを体験して、普段の生活では知りえることの出来ない様々な体験をすることが出来た。自分が調べる分野についても、今まで自分が知らなかった様々な発見があつて、考え方を改められたり違う角度から物事を考える知識を身に付けることが出来たりなど、今回の旅はとてもの好奇心に満ち溢れ、そして物事を色々知ろうという意欲に駆り立てられることが多いものだった。そしてその分、自分がいかに世の中の色々なことを知らないでいたかとも思い知らされることとなった。

私は今回「イギリスの日本語教育」をテーマとして調べることとなっていた。このテーマについて考えた時、イギリスという国は古くは世界を制し、今でもヨーロッパの中で他の国とはどこか雰囲気の違いが異なる高貴な国で、日本という遠く離れた世界について知っている人がいるのだろうかと思ったり、それでも日本も世界の中では経済大国としてそれなりの地位を育んできた国であるから、むしろ興味を抱く人も多いのではないかなど、色々な考えが頭をよぎった。事前準備として様々なことを調べていく際に少し分かったことは、やはり日本語はイギリスの人たちにとってはまだまだマイナーな言語であつて学ぶ人も少ないが、確実に日本語を学ぶ機会は増えているということだった。

実際にイギリスに行って、日本語教育についての話を聞くことが出来たのは二日目の英国国際教育研究所での図師先生のお話だった。ここでは現在のイギリスにおける日本語教育の実態を色々教えていただいた。その中には日本の文部省があまり他国における日本語教育に関心を持っていないため日本語教育が遅れていることを述べられ、そしてその考え方の根底には、日本人の考え方というものが「自分にとって」ということに非常に重きをおいているためではないかということをお話された。そして教育というものの一番大事な考え方は、教えるもの重視ではなく、学ぶ者のためにあるということをおっしゃられていた。言われてみればなるほどと思つたが、この考え方を最初にすることは難しいことだろう。そしてイギリスの人たちが日本に興味を持たない理由は日本にもたくさんあるということが分かった。イギリスに行って驚いたことの一つに、意外にも多くのイギリス人が日本語の基本的な挨拶の言葉である「こんにちは」や「さようなら」を知っていたことだ。しかも紳士的なイメージからもっと冷たい国であるかと思つていたがそんなことは全然無く、みんなが気軽に挨拶をしてくれたことに驚いた。全く日本について興味がないものかと思つていたので嬉しく感じたというのもあるが、これを思うと自分達のほうがイギリスについて何も知っていなかったなということをおもひ知らされた。図師先生のその他のお話の中に「真の国際理解教育」のことについても述べられていて、日頃授業の中で何度もこの問題について話してきたが答えは出てこないままであつたが、先生のお話を聞いて少し答



えが見えてきたような気がした。

次に日本語教育の現場に居合わせることが出来たのはハロー学校での日本語の授業を見学させてもらった時であった。イギリスという国で日本人が日本語教育をするということは珍しいことであるらしく、ほとんどはイギリス人が日本語を教えるという。そんな中、他国で日本語を教える高田先生はその経歴を聞くだけでもとてもすごく、母語だから教えるのは簡単だろうな、などと思っていた私の考えは見事に打ちくだかれた。やはり英語を話せるというのが大前提であるらしく、そしてイギリスで教えるとなると他の言語の習得もしなければ難しいらしく、一体どれぐらいの努力をしてきたのか検討もつかなかった。しかし、先生が「今とても幸せです。」と言われた言葉にとっても実感がこもっていて、羨ましく思った。

最後に見ることが出来たのはリーズ大学での日本語の時間であった。ハロー学校をお邪魔した時にも驚いたのだが、みんなとても覚えが早い。この時一人一人について教える機会があったが、漢字も書くことができるし、たわいも無い会話ならほとんど支障がない。これはやはり学ぶものの姿勢の違いなのか、それとも教え方の違いなのか。イギリスでの日本語教育がマイナーであっても、その授業の一つ一つはとても奥深くきちんとしているものである。そしてみんなが興味を持って楽しく学んでいることがすごいことだなと感じた。またここで感じたことは、自分がこれほどまでに英語が喋れない、そして聞き取れない実態であった。

日本語教師を目指そうと思ったのは、母語だからきっと簡単だろうし、そんなに努力しなくてもなれるものなのではないかと思っていた部分があったが、今回の旅でそういった考え方は間違いだらけであったことがよく分かった。かなり将来に対して不安を感じるようになったが、甘い考えかたであったことを早くに分かることが出来てよかった。そして、イギリスは思っていた以上に人が親切で住みやすい国である。日本の教育システムとは明らかに違った場所で教育を受けてみたら一体どのように変わってくるのだろうか、知ってみたいなと思った。機会があればまた行けることが出来たらいいなと思う。この旅で学んだことはまだまだたくさんあるのだが、自分の夢に向かうためにまずやるべきことは英語の勉強であるので、その努力を怠らないように頑張っていきたいと思う。

2002年、米ドルに次ぐ世界第2位の「スーパー通貨」ユーロが完全な通貨として登場した。現在、12ものヨーロッパ諸国が、マルクやフランといった伝統ある国民通貨を捨てて共通通貨を導入している。しかしイギリスはこのユーロには不参加である。そこで、今回の英国フォールドワークでは統一通貨「ユーロ」を題材に、イギリス人のユーロへの意識や関心について調べてみたいと思った。そして、そこから見えるユーロの問題点やメリットを考えていくことにする。

### (1) EUの挑戦

現在EU加盟国はアイルランド、イギリス、スウェーデン、フィンランド、デンマーク、ポルトガル、スペイン、フランス、イタリア、ギリシャ、ベルギー、オランダ、ドイツ、ルクセンブルク、オーストリアの15カ国である。そのうち、統一通貨ユーロ加盟国はイギリス、スウェーデン、デンマークを除く12カ国となっている。ユーロの現金流通は今年2002年1月1日から始まった。ATMや銀行口座はユーロのみとなったが、2月末までの2ヶ月間は各国現金も流通していた。そして2002年3月1日、ついにユーロの専一流通となった。

ユーロの導入は99年1月1日にさかのぼる。しかしユーロは銀行口座振替による「帳簿貨幣」であった。現金は各国の紙幣・硬貨が使用された。2001年末までの3年間、ユーロの使用は企業や個人の自由選択にまかされ、ユーロを使用するのは金融機関や大企業だけであった。消費者や中小企業は自国通貨の使用を継続した。日ごろ使用しない「バーチャル通貨」になじみが湧くはずがない。ユーロ硬貨は12月後半に購入できたが、ユーロ札は2002年1月1日に初めて一般市民の手に渡ったのである。大晦日の深夜から各国のATMの前には行列ができ、初めて手にするユーロ紙幣に市民は大きな関心を示した。

### (2) ユーロが国境をなくす?!

ヨーロッパというのは、飛行機で1時間も飛ばば隣の国にいけるし、車でも3時間走れば通り抜けられる「県」のような小さな国もある。そしてそのたびに通貨が変わるといのは不便だ。両替すると手数料もかかってしまう。しかし通貨統合すると、このデメリットはなくなる。もうひとつ、通貨の変動がなくなるというメリット。共通の通貨を持つことでヨーロッパ全体が非常に強いユニットになり、ドルや円に対抗できるのだ。

ただ現実問題として、ユーロが本当に強くなるためには、イギリスのユーロ参加は不可欠なのだ。世界で最も優れた金融専門能力を誇るロンドンの金融シティが、ユーロを自らの通貨として使用するようになれば、ドルに対するユーロの対抗力はおそらく飛躍

的に高まるであろう。イギリスのユーロ参加の意義は大陸諸国にとってきわめて大きい。イギリスでも、シティや産業界の人々は、このままではイギリスだけ乗り遅れるからユーロに参加したいと思っている。しかし今の時点で国民の6割の人が反対している。

では、ユーロ使用のデメリットは何なのか？それは通貨統合したことにより、自国の通貨主権を放棄したことが考えられる。たとえば、自分の国が失業率が高いと思えば通貨の量を増やせばいいという金融緩和ができる。物価が高くなってきたら金融引き締めをし、通貨の量を自国で調節できる権利を通貨主権という。しかし、ユーロに参加して通貨統合してしまうと、自分のところで通貨の量は調節できなくなってしまうのだ。

以上のことが考えられるが、実際イギリス人の意見を聞いてみると、もっと違った意見が得られるかもしれない。自分の英語に問題があるかもしれないが、頑張ってインタビューしてみようと思った。

### (3) 実際に現地の人々の声を聞いてみて

今回の英国フィールドワークのテーマとして、私はユーロを選んだ。その主な理由は、フランスやドイツなどが自国の歴史ある通貨を捨て、ユーロに乗り換えるほどのメリットがみえてこないからである。ユーロのメリットを考えたとき、先に述べたように、確かに国から国に移動する時に通貨をいちいち両替しなくていいし手数料もかからない。しかし、私にはそれしかメリットが思いつかないのだ。よって、イギリスがなぜ参加しないのかをインタビューしてみてそこから考えていきたいと思った。以下、代表的な2つの意見のみ紹介したい。

「どこか違う国に行って買い物するとき、自国の通貨単位じゃない場合はまず自分の国ではいくらになるか計算して買うだろ？やはり自国の単位は切り離せない。これも文化とっていい。あなたも国際文化を学んでいるなら、このことがわかるでしょう？統一通貨を取り入れることは、その文化を捨てると考えてもいい。だから私はユーロが嫌いだ。」これは、あるイギリス人の意見である。

また、リーズ大学の学生（経済専攻）によると、「EUの最終的な目標としては政治的統一がある。その準備段階として今回の統一通貨ユーロ導入がある。たしかに統一通貨だけでみればメリットはすくないけどね。」と答えてくれた。彼の言うとおりで、本や新聞でもEUの政治的統合の話は読んだことがある。しかしEU内での統一通貨ができたことで世界は大騒ぎとなったのに、その裏には政治的統合という大きな目標がひかえていたとは。それを考えると、今の私ではまだまだ勉強不足である。今後もこの大きな挑戦に注目し、さらに考えていきたい。

- <参考文献> 田中文献 『手にとるようにEUのことがわかる本』1999  
佐藤雅彦 『経済ってそういうことだったのか会議』2001  
田中素香 『ユーロ その衝撃とゆくえ』2002

## 17. イギリスの政治体制

徳本絢

イギリスの政治体制の特色は立憲君主、不文憲法、議院内閣制を中心とした民主政治の制度である。現在エリザベス二世女王陛下が国家元首である。国家元首は行政府のさまざまな権限が与えられているが、それらは名目上で、内閣の助言に従い行使しているに過ぎない。最高権威は議会が持ち、この議会が立法権を、裁判所が司法権を、行政権は政府にゆだねられている。イギリスの憲法は、国の一連の基本原則を示す慣習や法律など細切れの集合体で、政治制度の根本を規定した憲法典は無い。この意味でイギリスは成文憲法を不文憲法の国と言われる。しかし、マグナカルタ、権利請願、王位継承法などの法律も、その後廃止された部分を除いて現在もなお有効であるため、ある部分は成分となっている。

今回のフィールドワークでは国会議事堂の教育ツアーに参加し、上院と下院を見学して、実際に国会議員が自分の席を確保しに名札をつける様子などもじかにふれることができた。代理の者が席を確保することは許されておらず、まさに自分の足で、その日の議論に加わる場所を獲得するところから政治の戦いが始まるのだとガイドの方は説明された。

### (1) 上院

上院の任務に、法案の審議、可決がある。上院は下院から送られてくる法案を再検討するという役目を果たしている。また、立法作業を開始する事によって、立法という業務を下院と分かち合っている。もう一つの役割は、政府の活動を監督する機能である。現政府の政策について質問、討論し、特別委員会を組織してその他の証言を取り付ける。上院はまた、控訴院の最高裁判所として司法的役割も果たしている。それは、上院は多岐にわたる専門知識を持つ人々の集合体であるが、それぞれ独立した主張を持つ個人によって構成されているためである。貴族議員は、選挙によって任命されない点、任意で登院する祭の手当てを除いては報酬を受けない。貴族議員の総数には上限は無く、現在の議員数は710人である。この中には、26名の大司教と司教、92名の世襲貴族委員が含まれる。また、2人の中国系、4人のムスリム、2人のヒンズー教徒も含まれている。1999年、貴族院法令により、92名を除くすべての世襲貴族の上院への参加権、投票権が排除された。大司教と市況、世襲貴族の人数は固定制であるが、各政党の議員数と無所属グループの議員数は絶えず変動している。

国会の幕開けは、上院での女王のスピーチに始まる。上院議員が席につき、女王が迎え入れられると、下院の方へ議員を呼びに使いの者が出される。が、使いの者の目の前で下院の扉は硬く閉じられてしまう。「開けてください」というノックをサインに扉は開けられ、そこまで請われるならばと下院議員は招きに応じる儀式がある。これは、議

会政治発祥の地イギリスの歴史になぞった儀式となって今も行われている。

## (2) 下院

行政権を担当する内閣は首相以下20名前後の閣僚で構成され、下院の第一党の党首が首相となり議員の中から大臣を選ぶ慣行ができています。内閣は議会の解散権を持ち、下院に対して責任を負う。行政府の最高権威は形式的には国王諮問機関の枢密院だが実質的には枢密院の中核である内閣が行っている。そのため歴史的には枢密院の一委員会から発展し、その委員会を主催する大臣が「同輩中の主席」=首相と呼ばれるようになった。法案は、上、下両院に提出できるが、下院の優越が1911年の議会法で確立し、租税、予算など重要法案は必ず下院に先に提出され、下院さえ通過すれば国王の裁可を受けて成立する。なお、法案には政府提出用のパブリック・ビルと、議員提出用のプライベート・ビルがある。下院議員は、18歳以上の国民による普通選挙によって、1選挙区1人の小選挙区制で選出される。定数は659人で任期は5年。下院議員の被選挙権は21歳である。下院議長は党籍を離脱し、賛否同数の場合以外採決には加わることはできない。

下院の内装は、上院のものとは比べて大変質素なものとなっている。これは貴族が中心となっている上院に対して、庶民が代表となる下院の精神を表したものである。イギリスの下院での議論の様子は日本のテレビでもよく放映されるが、議長の席、ブレア首相が手を置いて演説する席などを、まじかに見ることができた。また、採決の際はいったんすべての議員が外に出て、賛成と反対の別々の廊下に集まり、そこで数が数えられるため、自らの意思をはっきりさせないといけないシステムや、すべての議員の発言が記録され公開されるというしくみなどについても説明を受けた。

## (3) 政党

イギリスの政党は、保守党と労働党の2大政党制である。保守党は1830年代にトリー党から発展し、貴族的、地主的要素を伝統的体質とし、現状維持・保守主義の立場に立つが最近では、時代の要求を入れる柔軟性を備えている。労働党は、20世紀初頭に斬新的改革により社会主義を実現しようとする労働者階級を地盤とする政党で、社会の改革や、経済の改革を主張してきた。現在、労働党が与党、保守党が野党となっている。イギリスの主要政党にはそれぞれ党首、上院議会における作業を調整する党内幹事、最前列に座る省別スポークスマンがいる。大法官が、上院議長を務めるが、下院議長とは異なり、審議の進行を調整する権限は持たない。議会は院内総務の指導の下、自主調整を行う。上院与党のリーダーでもある院内総務は、上院全体の責任を担う。上院議員の多くは政党に属さず、無所属である。無所属議員をまとめる代表者はいるが、正当のような幹事はいない。無所属議員の独立性は上院の大きな特徴である。

#### (4) その他の儀式いろいろ

##### ・スウォード・ライン

イギリスの議会議場は長方形で、与党議員と野党議員が中央通路をはさんで向かい合って座る。昔は騎士が剣を帯びて議場に出る習慣があった。討論が白熱してくると、剣を抜こうとする者が現れ、決闘になりそうな騒ぎが起こる。そこで中央通路の敷物には、最前列の席から30cm距離に1本ずつ線が引いてある。この線を超えない限り、剣を振り回しても相手を傷つける事は無い。この線にさわっただけで批判の声が上がる。スウォード・ラインと呼ばれるこの線は、議会で暴力を振るってはいけないという感銘を見るものに与えている。

##### ・イギリス流採決の仕方

採決または表決は、意思決定の行為である。イギリス議会には採決の仕方に、発声と分列がある。問題に賛成のものは「アイ」、反対のものは「ノー」と別々に発声し、声量の大小から判断して可決、否決と決まる。また、先にも少しふれたように、分列採決の仕方もある。分列はイギリス流の記名表決である。議場の外側に左右1つずつ廊下がある。議長席の右側が賛成ロビー、左側が反対ロビーである。採決の際に賛成者は議長席の後方の扉を出て、賛成ロビーを通過して議長席の前方の扉から議場に戻る。反対者はこれとは逆に、議長席の前方の扉から、反対ロビーを通過して議長席の後方の扉から議場に戻る。賛否の出口を逆にしたのは、感情が高ぶったときの混乱を避けるためである。ロビーから議場に入る真中に、名前の頭文字別に3列の机といすが置いてあり、その間を議員が1列になって通り抜けられるようになっている。机のところで、「書記官」が通過する議員の名前をチェックし、「計算者」がその後ろで議員の数を数える。採決の仕方については、何度か検討され近代化を図ろうと検討されたが、今日でもなお、これらの旧来の方法がとられている。

##### ・シャドー・キャビネット

野党が質において強いということは、野党が政府・与党に対抗できるだけの指導体制をもっている政党であることを意味する。野党党首は現総理に代わって国王から組閣を命ぜられるべき総理候補者であり、国民からも次期総理と期待される人である。野党党首は国から特別の俸給が支給される。野党党首は幹部を中心に影の内閣(Shadow Cabinet)を組織する。影の内閣は俗称であって野党幹部で組織する党の執行委員会であるが、正規の内閣を構成する各大臣の所管事項に対応して影の大臣もそれぞれ責任分担が決められていて、政権についた場合に対処できるように準備を整えている。

このように、今回のフィールドワークでは、本などで調べた事柄を実際に議事堂内で体験することができ、ガイドの方の詳しい説明もあって、深く知ることができたと思う。

## 18. グローブ座

藤川恵里

ロンドンには古い歴史を持つ劇場が沢山ある。「グローブ座」もそれらの劇場の一つである。

「グローブ座」は、400年余りの時を経て、劇場が元あった場所に建築様式もそのままに再現されたものである。1997年6月12日、エリザベス女王（II世）の立ち会いのもとでオープンした。400年前にこの劇場を訪れたのもエリザベス女王（I世）であったから、人々の喜びは大きかったようである。建物は木造で壁は石灰、屋根はノーホーク地方のふきわらを使用したかやぶき屋根である。舞台全体はオーク材で作られている。この建築様式の最大の難関は、火災対策であった。「ロンドン橋がおちる」で歌われているような大火を経験したロンドンでは、現在でも木造建築にはうるさい。そこで、かやぶき屋根の上には点々とスプリンクラーが設置してあり、火災には十分な対策を施す設計が工夫されたのであった。エリザベス時代と同様に、熟練した塗装職人が模様をつけたり光沢を出したりして、石や大理石や宝石のような見かけを作り上げた。つまり、木の板がまるで大理石のように見えるようになっているのである。舞台の正面壁には両脇にドアがあり、中央には開口部がある。それは「発見」の空間として使われている。

舞台上方にはバルコニーがあって、楽士たちや俳優たちに使われていた。それはジュリエットのバルコニーになったり、「リチャード二世」の城壁や、「ヘンリー五世」のハーフラールの町の城壁になったりした。部分的に野外劇場となっており、昔農夫達の席として使われていた場所が現在立見席として使用されている。そこは今でも床にわらがまかされている。当時はこのあたりで取れるナッツの（チェスナッツ）殻が散乱していたそうで、それはわざと敷いたものなのか（フカフカして足が楽になるから）、それとも観客がナッツの殻を剥きながら中味を食べ食べ演劇を鑑賞した名残なのかはさだかでないとの説明であった。ただし、今後、当時の床を再現するために、わざわざナッツの殻を敷く計画があるそうである。立見席を選んだ場合、3時間の上演であろうと、それ以上であろうと、観客はずっと立ちっぱなしでいなければならない。炎天下であろうと、雨風が吹こうと、一度始まった演劇は最後まで上演されるから、立見席の観客は汗だくで太陽にさらされ、あるいは雨風に打たれて見続けるそうである。床に座ったりしゃがんだりすることは当時も今も許されない。ガイドの方は、立見席だけはやめたほうがよいとアドバイスされていた。ただし、立見席での特等席は、座席側の後方の壁沿いだそうである。つまり、疲れたら、壁にもたれかかれるから。

座席の方かというと、実際は当時のままの設計で固くて座り心地がいいとは言えないが、半円形を描いて並んだ客席からはさまざまな角度で劇を鑑賞することができる。ロイヤル・シェークスピア・カンパニーの俳優達が、この素晴らしい劇場で最高のパフォーマンスを見せてくれる。座席でも立見席でも、できるだけ前列には行かない方がよい

とのアドバイスだった。というのも、お茶目な俳優が突然観客に語りかけ、質問し、答を待つ。待っているのは俳優だけでなく、劇場全体の観客の目が注がれることになる。そうなると、何を聞かれたのかもわからなくなるほどドキドキし、正解を言おうとあせり、顔は真っ赤になって、それ以後の演劇は何も覚えていないほどあがってしまうからだそうだ。熟練のガイドさん自身もこれを経験したそうだ。客席は3階だてになっている。一番上の席は貴族などが劇場を溜まり場としている娼婦と入り込む席になっていて、観客は舞台上で演じられる演劇を鑑賞したり、一番上の席で演じられる貴族と娼婦の戯れを鑑賞したりといった具合に、演劇と日常をいったりきたりしながら劇場でのひと時を楽しんだというガイドの説明だった。演じられる演劇にも、そこに集まってくる市民の話や行動にも、当時の生活のすべてがここで演じられたということだった。

シェークスピアのように演劇を書く作家は当時 400 名近くいて、競っていたとのことだった。毎日上演される演劇は違って（毎日新しいものが上演されていた）、作家は当日に台本をもってくるので役者は練習する時間もない。そこで、自分のせりふのみを書いた紙をもらい、演出家の合図で出て行ってはせりふを言ってもどってくるというやり方をとっていた。つまり、誰のせりふの後に、誰のせりふがくるのかを知っているのは作家（演出家）のみであり、役者にはまったくわからなかったそうである。それで、作家が出番の合図をするのを忘れてしまうと、1回も舞台に出る機会を得ずにせりふの書かれた紙をもって家に帰る役者もいたそうである。

\*

ピカデリーサーカスの劇場で、シェークスピアの「ロミオとジュリエット」を観た。バルコニーは、建設現場の鉄柱を組んだようなものになっていて、2つの家の人々が決闘するシーンは皮ジャンを着た若者がチェーンをつかって戦うという現代風の設定。まるで現代の若者の愛の問題を取り扱っているような演出で、舞台に釘付けになってしまった。グローブ座には、シェークスピア・カンパニーが上演した数々の舞台シーンの写真や、役者が着た衣装なども展示されていた。その「ロミオとジュリエット」とは随分と異なった解釈であり演出であった。400年を経てもなお人々を魅了するシェークスピアの世界、そして、現代人にさまざまな創造力の素材を提供しているシェークスピアの世界に触れることができたように感じた。





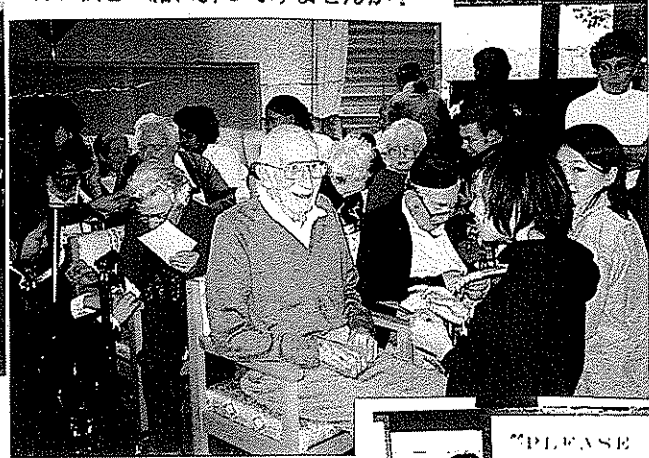
自作の「福笑い」を子どもたちに紹介した



「キラキラ星」を日本語で歌うと、子どもたちは同じ歌を英語とヘブライ語で歌ってくれた。

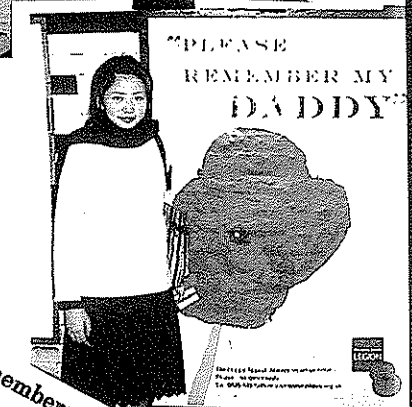


折り紙を一緒に折ってみませんか？



ロミオとジュリエットを演じた役者  
楽屋で待ち伏せ！

*With Many Thanks...  
to the people we met.*



Rememberance Dayの赤いポピー  
この日、日本人は外を歩きにくい...

リーズ大学で日本語の英作文を手伝っているところ



夜のパーティーで